# 二千六百年史展覽會圖録解説

300
139

始

納本

# 二千六百年史展覽會圖錄解說

300
139

# 二千六百年史展覽會圖錄解說

帝國圖書館藏

300
139

# 凡例

一、本圖錄は、大阪朝日新聞社主催の下に昭和十五年三月一日より四月三日まで大阪朝日會館において開催せられたる「二千六百年史展覽會」の拜展陳列品を收錄したものである。

一、本圖錄は「二千六百年史展覽會」の部門別に從ひ、又年代順を尊重した。

一、本圖錄は、紙數の制限や撮影の困難などのため、小部分や一面的な掲載に止つたもの、或は大小輕重の區分を輕視せる點あるなど、收錄上幾分の不體裁、錯雜さを免れ得なかつた、なほ圖面の明確化を考慮して特に目錄解說を別册としたが、努めて實體の把握には意を用ひた。

一、目錄、解說にはそれ〳〵の專門家を煩はした、且簡明を旨としたゝめ內容形式に一定せぬところがある、諒とされたい。

一、本圖錄の題字は岡野養之助氏の揮毫にかゝる。

# 一　仰ぎ奉る御聖德

一　桓武天皇宸影　滋賀縣　延曆寺藏

この宸影は延曆寺所藏原本によつて高島千藏が明治七年に模寫し奉れるものである。

二　嵯峨天皇宸影（延曆寺原本摹）　東京帝室博物館藏

三　清和天皇宸影　京都市　清和院藏

清和天皇の八百年の御聖忌について清和院住持良恭の謹寫せるもの。

四　醍醐天皇宸影　京都市　醍醐寺藏

五　醍醐天皇宸翰「敵國降伏」　福岡縣　筥崎宮藏

筥崎宮神寶に社傳醍醐天皇宸筆「敵國降伏」三十七通（紺紙金泥）が存する、本帖は右三十七通中書體を異にする宸翰三通の模本を收む、伏敵門勅額「敵國降伏」はこれを模寫擴大したものである。

六　國寶　後白河天皇宸影　京都市　妙法院藏

後白河法皇の宸筆と傳へらるゝもの、賦彩溫和、御尊容御雄偉、また御背後屏風の花鳥圖は宋元の畫風を帶びて非常に御立派なものである。

七　國寶　後宇多天皇宸影（烏帽子直衣宸影）　京都市　大覺寺藏

大覺寺殿の文字あり、御存命當時、またはそれに近き頃の謹作と推定される、樣式よりして或は御歷代宸影の部分かとも拜察される。

八　國寶　後宇多天皇御日記　京都市　教王護國寺藏

文保三年（紀元一九七九年）の具注曆に天皇御親らその日その日の御事を書き記されたもので、朝廷の御儀式をはじめ東寺への御參詣、またその頃の京都における事件等を書きとゞめ給ふ。

九　國寶　後宇多天皇宸翰御贊（弘法大師畫像）　京都市　教王護國寺藏

後宇多天皇の宸翰と拜せられる大師の贊文が記されてゐる弘法大師像中最も優れたものである。

一〇　**國寶**　花園天皇宸影　京都市　長福寺藏

花園上皇宸筆御奥書あり、豪信の謹寫に係る御法體宸影である。

一一　**國寶**　後鳥羽天皇宸翰　大阪府　水無瀬神宮藏

隱岐御在島中新しく沛入したる番匠男、鶏のこと等何くれとなく御近況を水無瀨信成の許に報じ給へるものである。

一二　後深草上皇院宣　奈良市　春日神社藏

文永、弘安之役後も長く元軍襲來の懸念は絶えなかつたので、舉國緊張の中に對策を怠らなかつた、この院宣は畏くも後深草上皇が宸襟を惱ませられて、正應三年（紀元一九五〇年）春日神社および興福寺にて異國調伏の祈禱をなすべき旨を藤原氏に下されたものである。

一三　後醍醐天皇宸影　奈良縣　吉野神宮藏

上方に「第二後醍醐天皇」の墨書がある。

一四　後醍醐天皇宸影（大德寺原本摹）　東京帝室博物館藏

天皇が淸凉殿の晝の御座にまします御姿を拜寫せるもの。

一五　後村上天皇宸影　大阪府　來迎寺藏

一六　**國寶**　後醍醐天皇宸翰御願文　和歌山縣　金剛峯寺藏

畏くも天皇宸筆になる御願文で、延元元年（紀元一九九六年）十二月廿九日に發せしめ給うたものである、この日は天皇が吉野に入御ましませし日の翌日に當る。

一七　**國寶**　長慶天皇宸翰御願文　和歌山縣　金剛峯寺藏

長慶天皇は後村上天皇の御遺志を繼がせられ、吉野朝廷の紹隆を常に念願あらせ給うた、この御書は天皇が上皇とならせられて後、高野山に納め給うた御願文である。「太上天皇寬成」の宸書は長慶天皇の御在位ありしを確定される有力な憑據となつたものである。

一八　**國寶**　護良親王御筆御祈願狀　和歌山縣　金剛峯寺藏

この御願文の元弘二年（紀元一九九二年）は、後醍醐天皇が隱岐に行幸あらせられ、護良親王が吉野に兵を起された年に當る、親王は御心深くも北條氏討伐を期せられ、所期の目的の達せられんがため、長日不斷の護摩を修め、佛法紹隆を專らにすることを、高野山鎭守の神たる丹生明神に御祈願遊ばされたものである。



一九　光格天皇宸影　京都市　泉涌寺藏

豐岡治資の謹寫せるもの。

二〇　**國寶**　光格天皇宸翰藥師經（濟仁親王御書繼）　京都市　仁和寺藏

この御經は宸筆を染め給ひ、半途にして崩御あらせられたので仁和寺に納められ、後に御猶子濟仁親王が書寫の功を終へ給うたものである、矢印が御書繼の場所。

二一　仁孝天皇宸影　京都市　泉涌寺藏

豐岡治資の謹寫せるもの。

二二　孝明天皇宸影　京都市　泉涌寺藏

權中納言堤哲長の謹寫になり、慶應年中禁裏より泉涌寺に納められたものと承る。

二三　孝明天皇宸翰御懷紙　京都市　東本願寺藏

本願寺光勝が庭の梅枝を折りて獻上したるにつき孝明天皇御嘉悅のあまり特に華麗なる御料紙を以て御風懷を述べさせ給うた御製宸筆で、近衞忠凞の添狀がある。

二四　孝明天皇御祈願狀　大阪市　坐摩神社藏

幕末に際し攘夷のための御祈願狀である、箱の表書は佐久良東雄の謹書せるもの。

二五　**國寶**　後奈良天皇宸翰般若心經　京都市　三寶院藏

天文八年（紀元二一九九年）諸國に洪水饑饉あり、翌九年疫病流行して災禍甚しく、天皇即ち三寶院第七十九代座主義堯僧正をして禁中に不動法を修せしめ給ひ、畏くも般若心經を御染筆あそばされたものである。

二六　後陽成天皇宸翰　京都帝國大學藏

天皇は學問を愛好し給ひ、殊に中院通勝を師として文學を御研究あらせられた、この宸翰は天皇御親ら源氏物語乙女卷を講じ給うたにつき、通勝に意見を召させ給へるものである。

二七　後陽成天皇宸翰「豐國大明神」　京都市　高臺寺藏

豐國神社創設について後陽成天皇が宸筆を染めて神號を書

せられたものである、裏に慶長四年九月道澄准后の記文がある。

**二八　和宮親子内親王御筆**　京都市　仁和寺藏

御幼少の頃の御筆と承る。

**二九　光明皇后御影**（木村武山氏謹寫）　東京市　野間左衛子氏藏

大正十年第八回院展出品作。

**三〇　舍人親王御影**　東京帝室博物館藏

**三一　國寶　聖德太子御傳記殘簡**　京都府　三千院藏

平安末期の書寫にかゝるものと想はれる。

**三二　聖德太子御影**（御物摹）　東京帝室博物館藏

原本は御物で、唐本御影といひ、百濟國阿佐太子の謹作と稱せられる、聖德太子と王子たる山背大兄王、殖栗王の御姿を寫し奉つたもので、奈良前期の畫風を示し、聖德太子御影のうちで最も貴いものと拜される。

**三三　國寶　聖德太子御影**　京都市　仁和寺藏

太子が十六歲の御時、父帝用明天皇の御惱平癒を祈願あらせらるゝ御姿で、世に太子孝養圖といふ、鎌倉時代の渾熟した畫技をよく示してゐる。

**三四　國寶　聖德太子勝鬘經御講讃圖**　兵庫縣　斑鳩寺藏

太子が勝鬘經を講讃し給へる御姿で、大兄王を初め奉り、馬子、妹子、覺哿、惠慈らが御前に聽聞してゐる圖、鎌倉末期の謹作になり、勁健な描線と重厚な彩色は注目すべきである。

**三五　十七條憲法板木並拓本**　奈良縣　法隆寺藏

弘安八年（紀元一九四五年）三月開板施入の旨の刊記がある。

**三六　勅版日本書紀神代卷**　東京市　安田一氏藏

後陽成天皇はつとに學問興隆に心を用ひさせられ典籍梓行の叡慮あり、偶々活字印刷術の傳來を機とし、その法に倣つて木活字を製せしめ、日本書紀神代卷、北畠親房の職原抄を始め四書、孝經等和漢の書を開板せしめ給うた、以下數種の書は傳本極めて稀であつて、世に慶長勅版本と稱せられる。

**三七　勅版日本書紀神代卷**　大阪市　天滿宮文庫藏

**三八　勅版古文孝經**　愛知縣　刈谷町立圖書館藏

**三九　勅版職原抄**　京都帝大內　古梓堂文庫藏

**四〇　勅版職原抄**　東京市　安田一氏藏

**四一　勅版錦繡段**　京都市　杉原三郎兵衛氏藏

**四二　勅版皇朝類苑**　堺市　祥雲寺藏

後水尾天皇が御父帝後陽成天皇の御意を御繼承遊ばされ銅活字をもつて版行せしめられたもので、これは天皇御親ら澤庵禪師に賜はつたものであると承る。

**四三　明治天皇グラント將軍と御對話筆記**　京都帝國大學藏

明治十二年（紀元二五三九年）六月アメリカ元大統領グラント將軍が世界周遊の途次わが國に來遊したが、畏くも明治天皇には同年八月十日濱離宮中島御茶屋に招延し給ひ、當時わが國にとり最も重要な問題であつた國會開設と條約改正とにつき約二時間にわたり御對話遊ばされた、本書はその御對話の筆記で和英兩文がある。

**四四　國寶　譽田宗廟緣起**　大阪府　譽田神社藏

譽田宗廟の社壇を應神天皇の御廟前に興し奉る由來と、譽田八幡大菩薩の利生とを描いたもの、絹地に克明に描かれ室町時代の優秀作である、繪の筆者は光信の父住吉廣周との說がある、奥書によれば永享五年（紀元二〇九三年）足利義教が奉納したものである。

## 二　肇國の精神と古代の文化

**四五　御物**　家屋文鏡（大和國北葛城郡佐味田出土）　宮内省諸陵寮

明治十四年（紀元二五四一年）同地の寶塚古墳から出た古鏡であつて、その鏡背に古代の家が表はされてゐる、牀高の草葺家を寫したらしく、當時の家屋の有様を窺ふ好資料である。

**四六**　日本古圖　京都市　仁和寺藏

鎌倉時代嘉元三年（紀元一九六五年）の寫にして現存せる日本古圖中最も古きものゝ一つである、所謂行基圖の性質と來歴とを考ふる上に重要なものである、人數六十九億一萬九千六百五十二人と書いてあるが、その頃の億は十萬だつたことなど興味深い。

**四七　國寶**　古事記　名古屋市　眞福寺寶生院藏

上中下三冊の粘葉本で、應安四年（紀元二〇三一年）および同五年に僧賢瑜の筆寫にかゝるものである、古事記の古寫本の傳はれるもの少く、抄本を除けば本書は最も古寫のものに屬する。

**四八**　古事記上卷抄　名古屋市　眞福寺寶生院藏

本書は主として諏訪明神の御祭神建御名方神の御事蹟を集録したものである、筆寫時代は鎌倉末と考へられ、應安年間（紀元二〇三〇年頃）の古寫本たる前記眞福寺本古事記よりやゝ遡り得るもので、抄本ではあるが古事記研究上貴重なものであらう。

**四九　國寶**　日本書紀（神代卷下卷）　京都府　向神社藏

延喜四年（紀元一五六四年）の奥書ある古寫本で、國學者六人部是香の複寫が添へてある。

**五〇　重美**　日本書紀斷簡　東京市　佐佐木信綱氏藏

日本書紀神代卷の斷簡で古寫本中最も古いもの、京都田中氏所藏の應神天皇の卷と同筆のもの。

**五一　國寶**　延喜式神名帳　東京市　公爵　九條道秀氏藏

延喜式の古寫本として一條家本と列び貴重である、全部五十卷の中二十七卷（卷七は二本あり）の重要な過半數が藏せられ、書寫年代は藤原末と推定されてゐる、なほ全體を通じて時々手入が行はれたことがわかる。

**五二　國寶**　神皇正統記　京都市　猪熊信男氏藏

現存する神皇正統記諸本のうち本書の特色は、古くして且つ白山比咩神社本に對し原本に近いものと想はれることである。

**五三**　古老口實傳　奈良縣　天理圖書館藏

伊勢神宮の祠官の年中行事を始め種々の心得を記せるもの鎌倉後期の外宮禰宜度會行忠の著で、正和年間（紀元一九七二年頃）度會延誠の書寫せるものである、同時代の文書の裏を用ひて寫したもので、紙背文書も貴重である。

**五四**　橿原神宮外苑出土品　奈良縣廳藏

紀元二千六百年に當り、全國民運動によつて行はれた橿原神宮の擴張造營の事業に、一段と花を添へたのは各種參考資料の出土であつた、紀元を遡ること數百年以前の文化遺物たる繩文式土器を初め、彌生式土器以下各時代の遺物を出土した、これらはその代表的のものである。

**五五　重美**　繩文式土瓶形土器（常陸國稻敷郡高田村椎塚出土）　滋賀縣　下鄉共濟會藏

以下二つの土器とともに繩文土器中で形態の最も複雜な例をなすものである、この器の作りは全面磨研の内に構描の渦文を文様とし甚だ美麗であり、底に綱代の迹が捺されてゐる、丁度いまの土瓶のやうに、提梁を同じく土で作つてあるのも原始的な香がする。

**五六　重美**　繩文式鮑形土器（常陸國稻敷郡高田村椎塚出土）　滋賀縣　下鄉共濟會藏

鮑貝の形に似てゐる、胴部全面に磨消繩文線文様がある。

**五七　重美**　繩文式人面飾附土器（常陸國稻敷郡大須賀村福田出土）　滋賀縣　下鄉共濟會藏

壺形を成し、上半部に人面を附してそれが注口部をなしてゐる、通體繩文帶および磨消繩文渦狀文樣を以て飾つてある。

**五八**　鹿角器（陸前國宮土島出土）　滋賀縣　下鄉共濟會藏

鹿角の岐部を利用した三方に支出する一器具、繩文土器のやうに全面に渦文が彫つてある、二ケ所に貫通する小孔を穿けるのは紐を通したらしい、原始時代に多い骨角製裝身具の一例をなすものである。

**五九**　彌生式魚形土器（名古屋市櫻田貝塚出土）　名古屋市　成田十九氏藏

彌生式土器は繩文式土器に對しその形態において實際的な

形のものを主とする、これはその器體が魚の形である點、當代人の漁撈生活を察せしめる面白い資料である。

**六〇** **重美** 彌生式家屋形土器 （伯耆國東伯郡舍人村出土）（下部缺失）

鳥取縣 安富寛兵衞氏藏

家形埴輪に似た外形をした極めて珍らしい遺品であり、棟の中央に口を開き僅かにその容器たることを示してゐる。

**六一** 彌生式壺 （船の繪あるもの）（大和國磯城郡唐古出土）

京都帝國大學藏

昭和十二年春同地の遺跡から出土した破片によつて復原したものである、その器腹に人物の漕ぐ舟の圖等があつて上代人の生活の一面を示すものと想へる。

**六二** **國寶** 方格規矩渦文鏡 （山城國乙訓郡向日町出土）

大阪市 平泉平右衞門氏藏

支那漢代に盛んに作られた方格規矩四神鏡をば、換骨奪胎して古代のわが國人が作り出した最も美しい鏡の一つである、元來鏡背にあるべき文樣帶の一つを面の緣に表はしてゐる點は形にとらはれぬ上代人の自由な意匠とも見るべきである、しかして現在その面に他の小さな一面の鏡が銹着いてあつて、もと古墳に副葬された原形を示してゐる。

**六三** **重美** 有柄細形銅劍 （筑前國糸島郡三雲出土）

福岡市 聖福寺藏

安政五年（紀元二五一八年）甕棺遺跡から出た遺物の一部である、特色ある把を作り附けてあり、次の精白鏡とともに彼地から舶載されて我が古代人の愛重したものと考へられる。

**六四** **重美** 內行花文精白鏡 （筑前國糸島郡三雲出土）

福岡市 聖福寺藏

前記銅劍とともに出土したもの、銘文等から支那前漢時代の製作と認められる。

**六五** 廣鋒銅鉾 （對馬出土）

東京帝室博物館藏

支那に行はれた銅鉾の形を採つて我が古代に鑄造したものであつて、本來の武器の形から離れて全く寶器化してゐる作られた時代は少くも今から二千年も前であらう。

**六六** **重美** 袈裟襷文銅鐸 （越前國坂井郡大石村出土）

名古屋市 富田重助氏藏

鐸身の袈裟襷文の間に人物、鳥禽類など珍らしい繪畫のあるもので、銅鐸としては古い形である。

**六七** **重美** 流水文銅鐸 （越前國坂井郡大石村出土）

西宮市 辰馬悅藏氏藏

前者と同時に出土した古調の多い銅鐸である、これは流水紋に加へるにその間に鬪爭、狩獵、船漕等當代人の實生活の樣相を描いてゐる。

**六八** 袈裟襷文銅鐸 （近江國野洲郡小篠原出土）

西宮市 辰馬悅藏氏藏

**六九** 流水文銅鐸 （阿波國麻植郡川島町川島出土）

西宮市 辰馬悅藏氏藏

**七〇** 袈裟襷文銅鐸 （播磨國宍粟郡神戸村閏賀出土）

西宮市 辰馬悅藏氏藏

**七一** 連珠文四鈴鏡 （磐城國平町附近出土）

京都市 守屋孝藏氏藏

支那古鏡の系統を承けたものであるが、その緣に鈴を附したのは我が鏡作部の創意に出でたと見るべく、此の如きは他の國に類例がない、その鈴の數は一定せず少きは四個から多いのは十鈴もであるが、多くは五、六個である、鈴の中には小石があつて今も打振るとゆかしい鈴音を發する。

**七二** 變形五乳文五鈴鏡 （上野國藤岡町附近出土）

京都市 守屋孝藏氏藏

**七三** **重美** 變形七乳文六鈴鏡 （傳大和國添上郡帶解村出土）

京都市 守屋孝藏氏藏

**七四** **重美** 半圓方形帶神獸文七鈴鏡 （傳大和國出土）

京都市 守屋孝藏氏藏

**七五** **國寶** 金銅馬具 （日向國兒湯郡西都原出土）

京都市 守屋孝藏氏藏

西都原に多數ある古墳中の一つから出土したと傳へるもので、鞍橋の飾金具から轡、杏葉、雲珠等の裝飾品に亙つてゐる、孰れも銅製鍍金で今も綠鏽の間に鮮かな金色を殘しその或者には文樣化した双龍透文を表はしてをり、雲珠にはうちに小石を容れて鈴の音を發せしめるやうになつてゐる、上述の透文は支那六朝時代の式を傳へたもの、本邦出土の馬具として優れた一つである。

**七六** 短甲系甲冑 （復原製作）

京都帝國大學藏

原始形は强い皮革から成るらしいが、比較的幅のある金屬板を鋲で留めるか革綴にする、從つてその構成は强直であるけれども、曲線的な構成線にはたしかに人に壓し迫るものがある、今日までの硏究ではなほ不十分な點も尠くはないが、日本固有的な甲冑と考へられる、この甲冑は各地出土の資料を復原して一體と成したものである。

**七七** 挂甲系甲冑（胴丸式） （復原製作）

京都帝國大學藏

皮革なり金屬板なりを細かく切つて紐で連綴した形式であ

つて、小札甲冑ともいはれる、裝着しては屈伸自由な特色はあるが、短甲のやうな毅然とした外觀に乏しい、出土分布および現存資料などから大陸に源流を求めることが出來る、特異な點としては冑に原始的な動物、魚類、幾何學的文樣を表はすことがあり、また透し彫と垂飾を施した場合もあつて、これ等は漢式鏡の文樣や古新羅時代の金工と共通してゐる點は特に看過してはならない、これは各地出土の資料と埴輪の表現を綜合して復原を行つたものである。

**七八　武　裝　埴　輪**　（上野國新田郡愛宕山出土）

東京市　小野賢一郎氏藏

**七九　裝　飾　附　臺　附　坩**　（播磨國揖保郡中垣内出土）

東京帝室博物館藏

上代古墳營造の時期を通じて實用の容器であつた祝部土器の壺の一種であるが、これはその肩部に小壺を作り添へたうへ更に舟や小鳥などの珍らしい立體形の裝飾を加へた點で、上代陶工の餘技を徵し得るものがある。

## 三　國風文化の發展

**八〇　象　墜　並　象　墜　記**

高松宮家御藏

象墜とは象牙彫の根つけのことである、丹後の人小島彤山の作で盧生の夢の圖を現はしたもの、象墜記は文政十年（紀元二四八七年）に賴山陽がこの象墜を觀てその精密さに驚き自ら草したものであるが、その記によると、この象墜（間口一寸、奥行五分、高さ一寸）には樓閣十四ならびに人物八百八十人と馬、象、鹿、小鳥などがこまかに彫られてあると。

**八一　藤　原　鎌　足　畫　像**

東京市　公爵　三條公輝氏藏

傳光重筆。

**八二　柿　本　人　麿　畫　像**

東京市　齋藤茂吉氏藏

橘千蔭の賛があり、別に千蔭の書二通も添へられてゐる。

**八三　萬　葉　集**

東京市　佐佐木信綱氏藏

現存する唯一の天治本卷十四。

**八四　國寶　三十六歌仙赤人像**

東京市　藤原銀次郎氏藏

鎌倉初期の名匠藤原信實筆三十六歌仙の一たる山邊赤人の像で、佐竹侯爵家舊藏のものである。

**八五　三　十　六　人　家　集**　（寫）

京都市　伯爵　大谷光照氏藏

三十六人家集は貫之以下三十六歌仙の歌集總て三十九帖あり、天文十八年（紀元二二〇九年）後奈良天皇より西本願寺の證如上人に下賜あらせられたもので、草假名の妙と彩牋の美とをもつて古筆中隨一の神品と稱せられる、書寫の年代は元永頃（紀元一七七九年頃）と想はれ、筆者には世尊寺定信がやゝ確實に推定される外およそ二十家の名筆を數へることが出來、粘葉裝である、用牋は繼紙、から紙、陸奥紙、厚紙などで文樣を施し、まゝ下繪を描いたものもあるが、他に類のないのは繼紙で、切繼、破繼、重繼などの技巧を用ひ、藤原氣分が横溢してゐる、これはその內の貫之集下卷と伊勢集とで、田中親美氏の摸寫になるもの、原本とまがふばかり精巧に出來てゐる。

**八六　弘　法　大　師　畫　像**

京都市　大　通　寺　藏

後宇多天皇宸筆の御賛がある。

**八七　國寶　傳教大師入唐牒**

滋賀縣　延　暦　寺　藏

傳教大師が入唐の際の旅行證で、貞元二十年（紀元一四六四年）九月、明州司戶參軍孫負が認可の署名したものと、貞元二十一年三月臺州刺史陸淳が認可署名したものとの二通である、後者は大師の自筆にかゝる。

**八八　國寶　傳教大師將來目錄**

滋賀縣　延　暦　寺　藏

傳教大師が入唐、天臺山に向ふ途次、越州で龍興寺の順曉を訪ねて灌頂を受け、寫し得たる經典、經疏、念誦法、供養具樣、祖師高僧傳並に順曉より附法印信として授けられた供養具等の將來品を列記した目錄で、傳教大師筆と傳へられる。

**八九　國寶　扇　面　法　華　經**

大阪市　四　天　王　寺　藏

扇面法華經は藤原末期に行はれた一種の寫經で、扇面型の料紙に金銀の截箔押、砂子散或は墨流等を以て裝飾し更に種々の下繪を描きその上に妙法蓮華經等を書寫したものである、現在大阪四天王寺に百二枚を、帝室博物館に一帖二十二枚を、奈良縣法隆寺、滋賀縣西教寺に各一枚を藏し、その他個人間に分藏されてゐるのが數枚ある、絢爛たる藤原文化を窺ふべきものである。

九〇　國寶　和名類聚抄　　東京市　保坂潤治氏藏

高山寺舊藏本で、名古屋市寶生院所藏のものよりも古く、鎌倉初期を下らない頃の書寫にかかるものであらう、流布本に比して相違が多い。

九一　北野天神緣起　　京都市　北野神社藏

北野天神緣起の一種で道眞の傳記を描ける繪卷である。

九二　國寶　時雨螺鈿鞍　　東京市　侯爵　細川護立氏藏

詳しくは時雨文螺鈿軍陣鞍と呼ぶべき鎌倉時代の類品中最高峰を占むる軍鞍である、黑地に螺鈿で繪と歌とを交へた所謂蘆手繪を以て「新古今集」にある慈圓の
我戀は松を時雨のそめかねて眞葛が原に風さわぐなり
の歌意を表はしてある。

九三　國寶　螺鈿蒔繪小唐櫃　　和歌山縣　金剛峯寺藏

經卷を入れるために作られた小唐櫃で、藤原時代の優雅典麗な好みが隅々までも行き渡つてゐる。

九四　大津京關係遺蹟出土品
古瓦　（大津市南滋賀字勧學堂遺蹟出土）
泥塔、壺、皿、皿蓋、古瓦　（以上大津市滋賀里出土）
京都帝國大學藏

大津京は天智天皇が六年三月（紀元一三二七年）に奠都された所であり、これらはその舊址と傳へる地から出土したものである、古瓦には普通に見受ける蓮華文の丸瓦や、唐草文の平瓦の外に南滋賀から出た古瓦のうちには、大きな四角張つた平瓦に四角と丸の軒先瓦當を附した組合せの一群があつて、これはその四角な瓦當の文樣とともに他に類例を見ないものである、またその鬼瓦文樣の一部に樹木を表はしてゐるのも珍らしい、なほ滋賀里出土の皿のうちに綠釉を施したものゝあるのは當代の窯業の發達を徵する資料である。

九五　藤原京址出土古瓦　　東京市　日本古文化研究所保管

藤原京は持統、文武、元明の御三代十七年間の皇居であるが、大和國高市郡鴨公村高殿にその傳說地がある、これらの古瓦はその地からの出土品であつて、時代は白鳳期と推定されるものから、その以後の時代に亙つてをり、丸瓦では複獅子式八葉蓮華文、平瓦では蔓の長い唐草文が多い。

九六　平城京址出土古瓦　　奈良縣　保井芳太郎氏藏

奈良朝御七世の皇居であつた平城京址からの出土品、丸瓦では複瓣の蓮華文と重圏文、平瓦では唐草文、重弧文、雲文がある、しかし主としては唐草文である。

九七　平城宮大極殿址出土古瓦　　東京帝室博物館藏

割合に小形で細い複瓣八葉の形式である。

九八　平城京址出土品　　奈良縣　溝邊文和氏藏

和同開珎＝和同開珍と讀むべきか寶を略したのかは未だ明らかでない、元明天皇和銅元年（紀元一三六八年）正月武藏國秩父郡より自然銅を獻じたので年號を「和銅」と改め二月に鑄錢司が置かれた。
萬年通寶＝天平寶字四年（紀元一四二〇年）に改鑄して新錢の一を以て舊錢の十に相當せしめたのがこの萬年通寶である。
神功開寶＝天平神護元年（紀元一四二五年）に鑄造。
右三種の古錢は皇朝十二文錢といはれる奈良平安朝時代の鑄造錢中の古式に屬する錢貨である。
履物＝これ等の錢貨や古瓦などとともに埋れてゐたもので小鼻緒の位置が夫々偏位し右左が定まつてゐる。

九九　國寶　黃金裝太刀　（京都市山科出土）　　京都帝國大學藏

今は金裝具のみ鐵鐔の中に輝いてゐるが、元はこんな單調な太刀ではなく、鞘には更に銀平脫の小さな蕨手狀若しくは渦文狀裝飾が施されてゐたらしく、足金具の間に僅かにその俤を留めてゐる、且これをよく見ると、鞘尾の金具には佩用したためにかなりな擦傷が見られる、この種の遺品は正倉院に多數尊藏されてゐるが、出土品としては殆んど唯一のもので、奈良時代の工藝を推す好資料である。

一〇〇　國寶　金銀平脫雙鳳文鏡　（京都市山科出土）　　京都帝國大學藏

平脫とは金銀の切り拔いた薄板文をば漆と併用して裝飾する表現法で、この鏡には二羽の鳳凰が鈕を巡るの狀を表はしてゐる。

一〇一　恭仁京址出土古瓦　　京都府　恭仁尋常高等小學校藏

聖武天皇が奈良から御遷都になつて都城を營まれ、のち山城國分寺へ御施入になつた遺址からの出土品で、下のは鬼瓦の破片である。

一〇二　平安京址出土古瓦　　東京帝室博物館藏

唐草文を印した平瓦で、綠釉を施してある。

一〇三　重美　平安京羅城門鬼瓦　　京都市　觀智院藏

一〇四　**重美**　平安京大極殿址出土緑釉瓦

大阪市　黒川福三郎氏藏

桓武天皇延暦十三年（紀元一四五四年）以後千年間の帝都であつた平安京の址から出る古瓦のうち遷都の當時使用されたと覺しい遺品であつて、その平瓦は唐草文の上に美しい緑釉が施されてゐる。

一〇五　**重美**　太宰府都府樓址出土蓮華唐草文塼

福岡縣　觀世音寺藏

古代九州統治の中心をなした太宰府の都府樓の址から出たものであつて時代は奈良朝に屬してゐる、この新羅系の華文を飾つた大形の文塼は、當時大陸との交渉を物語るものとして興味が多い。

一〇六　太宰府都府樓址出土古瓦

福岡縣　觀世音寺藏

一〇七　狛犬　一對

京都帝國大學藏

鎌倉末の代表的木彫物。



## 四　武家の興隆と武士道

一〇八　菊牡丹作筒金腰刀

奈良縣　法隆寺藏

一〇九　**國寶**　短劍　銘眞守

大阪市　譽田神社藏

眞守は備前長船の刀工、鎌倉末期に鍛造したものと傳へらる。

一一〇　**重美**　樫鳥威大鎧

愛知縣　猿投神社藏

我が日本甲冑は上古代の短甲、挂甲の制に加へ、更に唐代の甲の長所を合せて平安初期に一形式の甲冑を完成した、大鎧或は式正鎧といひ、この鎧は卽ち初期式正鎧の典型として擧げ得る、部分的にはなほ幾つかの上代甲冑の要素を幾らか具備することもこの鎧の特殊性である、傳ふるところによればこの大鎧は源家八領の鎧の一つであつて、楯無に相當し、後三年役に伴次郎に賜はつて使用してゐたが、のち矢並左右衞門といふ人の家に傳へられ、應仁二年（紀元二一二八年）の春猿投神社に奉納したとある、かくて一旦神に捧げられたこの鎧は半世紀の後に再び戰場に出動した、そしてまた新たに唐櫃に納めて、永く猿投の神に奉り今日に至つてゐる、冑を缺き袖と脇楯の草摺は小櫻革威、袖には後年加工の迹がある。

一一一　前九年合戰繪卷

東京帝室博物館藏

前九年合戰繪卷の殘缺で、畫中に義家、貞任など文字の記入があり、簡潔にして妙味ある鎌倉時代の作である。

一一二　平治物語繪卷（摹）

東京帝室博物館藏

平治之亂を描いた繪卷で、第一卷「三條殿燒討」、第二卷「信西獄門」（岩崎男爵藏）、第三卷「六波羅行幸」の三卷であるが、最もすぐれた第一卷は海外に流出して米國ボストン博物館の所藏となり、第三卷は松平直亮伯の所藏であつたが、獻納せられて帝室博物館の所藏になつた、筆法秀潤、色彩豐麗、人馬活躍する繪卷中の名品で鎌倉時代の制作である、こゝに揭出のものは住吉如慶の模寫にかゝり、模本としても立派な價値がある。

一一三　傳源義家所用甲冑（一部）

京都市　岸本正之助氏藏

源家一族の尊崇した石淸水八幡宮に傳へられてゐたのであるが、寶暦年中烏有に歸し、いま殘つてゐるのはその金屬部である。

一一四　源平合戰圖屛風

下關市　赤間宮藏

金地二曲二雙の屛風に雲金をもつて區劃をつくり、源平合戰の種々な場面を描いたもので、一ノ谷、壇ノ浦など人馬軍船活躍し、興味をひく、制作は桃山時代。

一一五　**國寶**　平重盛畫像

京都市　神護寺藏

神護寺略記によれば同寺藏の國寶源賴朝畫像（次頁揭載一一七）と共にこれらの肖像畫は「右京權太夫隆信朝臣一筆奉圖之者也」とあり、有名な藤原隆信の描いたものといふ隆信は所謂似せ繪（肖像畫）の名手、その子信實と共に天下に共名を知られた巨匠である、兩幅ともにそれぞれ個性をよく表現し、細筆はまたよく面貌姿態描寫に餘す所がない所傳のごとく筆者を隆信としておそらく誤りなかるべく、鎌倉時代初期の繪畫遺作のうち第一の名寶である。

一一六　**國寶**　吾妻鏡

東京市　子爵　吉川元光氏藏

本邦における武家最初の記錄といはれ、武家の制度、文物風俗、習慣など鎌倉時代史研究に最も必要なる根本資料である、この吉川子爵家の古寫本は四十八冊よりなり、大永二年（紀元二一八二年）右田弘詮の書寫のものにて、吾妻鏡諸本中最も異りたる點多く、この意味においても貴重である。

**一一七　國寶　源頼朝畫像**　京都市　神護寺藏

前頁掲載一一五の平重盛畫像と同じく藤原隆信の筆と傳へられる、この巨匠の手によつて、頼朝は威容儼然、いかにも一代の覇將と仰がれるばかりに描かれてゐる。

**一一八　貞永式目**　大阪市　平林治德氏藏

本書には「康永二年三月三日於高辻富小路宿門書寫之訖」の奥書があり、また卷尾に十箇條の追加と八月八日付の泰時の假名消息とを載せてゐる。

**一一九　蒙古襲來繪詞**（御物摹）　東京帝室博物館藏

原本は文永、弘安の兩役に天下に驍勇を響かせた竹崎五郎兵衛尉季長が自分の勳功を書きあらはすため實戰の模樣を物語として當時の名高い畫家たる土佐長隆とその子の長章とに揮毫させ、その詞書を自ら綴つた繪卷物で、當時の模樣を推測することのできる立派な資料である。

**一二〇　元寇圖**（下村觀山筆）　第一高等學校藏

明治二十八年（紀元二五五五年）觀山二十三歳の作、蒙古襲來繪詞研究の所産と想はるゝ節あり。

**一二一　國寶　東巖禪師蒙古降伏祈願文**（文永七年五月廿六日）（文永八年九月廿五日）　一幅　一卷　京都市　正傳寺藏

この願文は東巖慧安和尚が蒙古降伏の祈禱をしたときのもので、言々句々祖國を懷ふの至情が溢れてゐる、文永八年（紀元一九三一年）のものの料紙最後尾の裏に書かれた「すへのよの末の末までわが國は、よろづの國にすぐれたる國」の和歌はこの祈願文にふさはしいもので、當時國民的精神の旺盛であつたことを知らしめる。

**一二二　蒙古使者趙良弼書狀**　京都市　東福寺藏

元使良弼は第三回目の使節として國書をたづさへ文永八年（紀元一九三一年）九月筑前今津に上陸して太宰府に至り自ら國王および將軍にまみえて國書を呈せんことを求めたが太宰府ではこれを拒み、押問答の末良弼は國書の副本のみを提出した、これはその時の良弼の書狀である。

**一二三　國寶　眞如堂緣起**（應仁之亂圖）　京都市　眞正極樂寺藏

三卷あり、掃部助久國の畫で、大永四年（紀元二一八四年）の作なること奥付に明白である、應仁之亂に關する部分は第三卷にある。

**一二四　異國警固番役覆勘狀**（深堀文書）　東京市　侯爵　鍋島直映氏藏

肥前の御家人深堀氏が異國警固番役を勤仕した終了證ともいふべきで、弘安三年（紀元一九四〇年）九月少武經資より與へたものである。

**一二五　國寶　北條早雲畫像**　神奈川縣　早雲寺藏

左手を膝上に置き、右手に金色の中啓をもち、墨染の衣に絡子をかけた法體の坐像である。

**一二六　重美　武田信玄畫像**　和歌山縣　成慶院藏

信玄の剃髮以前の壽像で、肥滿雄偉の體格、頰髯たくましく口髭すぐれ威容堂々たるものである。

**一二七　犬追物屛風**　東京帝室博物館藏

犬追物は鎌倉時代から行はれた遊戲の一種で、馬場に垣を築いて犬を放ち、馬に乘り弓をもつて射るもので、その方式に關する著述もある位であるが、この屛風はその實況を示す貴重な資料であると共に、江戸時代初期以前から始まつた所謂初期肉筆浮世繪の遺品としても價値がある。

**一二八　國寶　織田信長畫像**　愛知縣　長興寺藏

世に信長畫像の傳はるもの少くないが、その中で最も優れたものはこの畫像である、信長の近臣與語久三郎正勝が信長の一周忌にあたり報恩のために描かしめて長興寺に納めたもので、筆者は狩野甚之丞元秀（永德の甥）であることが紙背の落款印章で明らかである、畫風頗る生氣に滿ち一代の俊傑の風格を偲ばしめるものがある、信長の肖像には束帶姿と肩衣姿とがあるが、これは肩衣姿である、草色の肩衣に白の二引の袴をつけ、肩衣には桐の紋がある、この肩衣は天正裃とよばれるもので、當時武人の間で盛んに用ひられたらしい。

**一二九　重美　傳織田信長所用甲冑**　京都市　建勳神社藏

中世甲冑の一形式たる胴丸は戰國時代武將の多く裝着したものであつた。

**一三〇　織田信長出陣圖**　名古屋市　堀江瀧三郎氏藏

信長の初陣は天文十六年（紀元二二〇七年）十四歳の時で、三河吉良大濱へ發向して近邊に放火し那古野城に歸つた一戰で、その時のいでたちを描けるものである。

**一三一　織田信長自筆書狀**　(細川忠興宛)

東京市　侯爵　細川護立氏藏

天正五年(紀元二二三七年)信長に抗して松永久秀等兵を擧げたとき、信長は書狀を細川忠興に與へて、油斷なく軍忠を勵むべき旨を命じた、同日付堀秀政の添狀(下に揭載のもの)があり、信長自筆なる旨が記されてゐる、信長の筆蹟を決定する一つの基準として貴重なものである。

**一三二　國寶　豐臣秀吉畫像**

京都市　高臺寺藏

上に慶長三年(紀元二二五八年)八月十八日妙心寺南化和尙の贊があり、豐公生前に描かれたものと想はれる。

**一三三　豐臣秀吉畫像**

和歌山縣　蓮華定院藏

世に傳はる豐公畫像の多くは唐冠を戴けるに對し、これは東帶である點に特色があり、伊達家のそれとともに代表的なものである、筆者不詳であるが左上端に眞田安房守昌幸の署判があるから慶長(紀元二二五八年頃)當時の制作にかゝることを知り得る、もと眞田氏の所藏であつたのが後に蓮華定院の有に歸したものと想はれる。

**一三四　豐臣秀吉畫像**

京都市　藪內紹智氏藏

大谷吉繼の描ける豐公畫像に慶長四年(紀元二二五九年)妙心寺南化和尙が贊を加へたと傳へるもの。

**一三五　豐臣秀吉自筆書狀**

大阪市　石原重臣氏藏

この消息は豐公の自筆にかゝり、備中在陣の時側室に宛てたもので、灸の治療をすゝめる等が記されてゐる。

**一三六　豐臣秀吉自筆書狀**

大阪市　上野精一氏藏

文錄元年(紀元二二五二年)名護屋陣中より側室宰相に宛て端午の祝儀として帷子を送れることを謝せしもの、當時我が軍は連戰連勝、破竹の勢をもつて大陸を進軍しつゝあつた時とてその滿悅ぶり自ら文中に躍如たるものがある。

**一三七　豐臣秀吉　五奉行連書有馬溫泉藏米算用狀**

兵庫縣　打田清氏藏

豐臣秀吉はしばしば有馬の溫泉に湯治したが、その當時の樣子を語る資料は極めて乏しい、これなどはその貴重な資料の一つであらう。

**一三八　豐臣秀賴自筆書狀**

京都帝國大學藏

家康から鷹を贈られたことに對する禮狀で、大阪陣の始まる前より餘り隔たざるものと考へられる。

**一三九　伊達政宗畫像**　(土佐光貞畫)

京都市　東福寺靈源院藏



**一四〇　加藤清正畫像**

京都市　勸持院藏

慶長八年(紀元二二六三年)勸持院において中河壽林が寫した肩衣の畫像である。

**一四一　加藤清正書狀案**

京都帝國大學藏

家康、利家、秀家、輝元宛に泗川の戰勝を報じたもの、豐太閤の第二回朝鮮出動に際し、慶長三年(紀元二二五八年)明將董一元大軍を督して島津義弘、家久父子を泗川城に圍む、義弘二千の寡兵を以て防ぎ、十月一日城を出でて奮戰敵を敗走せしめた、本書狀はこの大勝を報じ、且つ豐太閤旣に薨去のため軍勢歸還の件に及んでゐる。

**一四二　德川家康畫像**

群馬縣　善導寺藏

**一四三　小早川隆景畫像**

京都市　黃梅院藏

隆景が菩提寺の黃梅院に傳へたもので、贊は同院第二代玉仲和尙の筆である。

**一四四　眞田幸村書狀**

東京市　小平三郞氏藏

大坂城中でのものである。

**一四五　眞田昌幸書狀**

東京市　小平三郞氏藏

甥小山田主膳正に宛てたものである。

**一四六　德川家康自筆日課念佛**

京都市　猪熊信男氏藏

世に家康の陣中念佛と稱して彌陀の名號を書きつらねたものがよくあるが、名號每に家康の自署あるは珍とすべきである。

**一四七　黑田長政所用水牛兜**

東京市　侯爵　黑田長禮氏藏

縅革包五枚胴具足、桃形鉢、茶糸威梅の冑に水牛角の脇立を付けてゐる、この兜は浦野某から長政に贈られ、長政は朝鮮陣にもこれを着用した。

**一四八　佐竹義宣所用甲冑**

東京市　侯爵　佐竹義春氏藏

具足は日本甲冑の最末期に現はれた形式であつて、火器に對する防備が特に注意され、「具足」の名は裝具完備せるの意味を表はす、この甲冑は戰國時代の武將の所用として極めて質實な、しかも防禦力の高いものであることは、現在右胴下部に銃丸命中の迹あるも貫通し得なかつたのでも明かで、悽愴な狀態を殘してゐる。

**一四九　關ヶ原合戰圖屛風**　（部分）

東京市　伯爵　津輕義孝氏藏

慶長十七年（紀元二二七二年）家康の養女として異父弟康元の女を津輕家に嫁せしめた時の輿入道具の一つ、關ヶ原合戰直後、實戰談によつて相當調べたものらしく、描かれた鎧武者實に二千餘人におよび合戰畫中の隨一と稱せられる。

**一五〇　紅下濃腹卷**

東京市　子爵　北條雋八氏藏

腹卷は輕裝を目的としたものであるが、後には冑や袖なども完備せしめたのもある、この腹卷は復古製作の波に乘つて現はれたものとして一顧に値すべき資料である。

**一五一　緋羅紗陣羽織**

東京市　子爵　北條雋八氏藏

**一五二　重美　刀**　（無銘傳義弘、名物村雲郷）

兵庫縣　瀨戸保太郎氏藏

長さ二尺二寸五分、大磨上、義弘は越中松倉鄕の住、相州正宗に學び門下十哲中の第一席と稱せられる名工である、村雲と號する所以は豐臣秀吉がこの刀を鑑賞して「村雲の樣なる燒刄なり」といつたに因る。

**一五三　重美　太刀**　（銘國時）

神戸市　並田源三郎氏藏

長さ二尺一寸、國時は鎌倉末期に肥後國菊池に在住した延壽派の良工である、この一派の刀工は忠臣菊池一家に仕へて興亡を俱にした。

**一五四　國寶　太刀**　（銘備前國長船住左近將監長光造）

兵庫縣　伊藤文一氏藏

長さ二尺四寸八分、長光は光忠の子で、その技は父の壘を摩し、長船物の名聲はこの二代によつて最高頂に達した、しかして長光は同銘二代あつて、將監長光は二代目と稱せられてゐるが、なほ硏究すべきである。

**一五五　國寶　太刀**　（銘光忠）

京都市　六鹿輝彥氏藏

長さ二尺三寸二分三厘、磨上、光忠は鎌倉中期に備前國長船に在住し、いはゆる長船物中の第一の名工である、この作は常に比しては小出來ながら流石に地刄に非凡の技を示してゐる。

**一五六　短刀**　（銘興里）

大阪市　橋本寅吉氏藏

新刀中で最もその名が知られてゐる江戸の住虎徹入道、卽ち興里の老熟の作で、同作の短刀は稀である、彫物同作。

**一五七　重美　高彫魚子地色繪十六疋獅子圖三所物**　（橫谷宗珉作）

兵庫縣　山村淸氏藏

宗珉は名を友常、通稱を長二郎（後治兵衞と改む）といふ、遯庵と號した、江戸神田に住み橫谷宗興の實子である、宗興は幕府の御抱金工で祿を給せられその作風も後藤家風である、宗珉は思ふところがあつて幕府の扶持を辭し町彫となり、徒らに先人の模倣に陷ることを厭ひ一機軸を出して名を後世に遺さんことを希ひ、狩野探幽、英一蝶により下繪を求め繪風彫金を創意し遂に一家を爲した、江戸中期以後殷盛を極めた町彫金工の名家はいづれもこの宗珉の流れを汲まざるものなく、町彫の開祖と仰がるゝに至つた、享保十八年（紀元二三九三年）八月六日六十四歲で歿した。

**一五八　重美　柏文象嵌鐔**　（埋忠明壽作）

兵庫縣　濱田新七氏藏

明壽は名を重吉、通稱を彥次郎といふ、慶長頃（紀元二二六〇年頃）の人で京師西陣に住んだ、刀劍鍛冶としても新刀開祖として有名である、鐔工としては金家、信家に比肩すべき稀正の名匠で、子孫門葉すこぶる多い、作風は板鐔に象嵌を施したもの多く、高雅にして品位極めて高い、足利義昭また秀吉、秀次にも寵愛せられたといふ。

**一五九　重美　薄肉彫象文鐵鐔**　（土屋安親作）

兵庫縣　濱田新七氏藏

安親は通稱彌五八といひ、後薙髮して東雨と號す、羽州庄内の產で江戸に出で、奈良辰政の門人となつた、正德、享保のころ守山藩主松平賴貞侯の抱工となり扶持二十人を受け江戸吹上邸に住居したといふ、作風は寫生風のもの、圖案風のものなど往くとして可ならざるなく、いづれも雅趣に富み、汲んでも盡きぬ滋味を存してゐる、門人に對して「細工人は一生貧なるものと心得、心のよごれざるやうにせよ」と訓戒を與へたのは有名な話で、もつてその自己の藝術に對する心構へを窺ふに足らう、利壽、乘意とともに奈良三作と賞讚せらるゝ名工である、延享元年（紀元二四〇四年）九月二十七日七十五歲で歿した。

**一六〇　重美　高彫色繪大森彥七圖鐵鐔**　（奈良利壽作）

京都市　淸田政人氏藏

利壽は奈良三代利治門（一說に四代利永門ともいふ）で通稱太兵衞といひ、江戸本所馬場町に住んだ、奈良派における代表的金工である、作風は溫雅のうちに勇壯の氣溢れてしかも騷しからず品位あり、まことに名人といひ得よう、奈良三作の第一位にあげられてゐる、元文元年（紀元二三九六年）十二月十四日七十歲で歿した。

**一六一　重美　高彫色繪猿猴捕月圖鐵鐔**　（金家作）

京都市　淸田政人氏藏

金家は足利末期の人で山城國伏見に住すといふ、古來鐔工中の第一人者として有名である、下繪に雪舟下畫を用ひたとの傳說があるがその眞僞はともかく、いかにも北畫の名畫を見るごとき雅味橫溢のものがある、時代傳記など詳か

でない。

**一六二　重美　高彫色繪豐干禪師圖眞鍮鐔**（土屋安親作）

大阪市　黑川福三郎氏藏

前揭一五九薄肉彫象文鐵鐔の項參照。

**一六三　梵字唐草圖鐵鐔**（信家作）

大阪市　黑川福三郎氏藏

信家は足利末期の人といふ、甲冑師の宗家として有名な増田名珍の十七代で、初め上州白井に住み後武田信玄に召されて甲州府中に移り、また相州小田原にも住したといふ、古來より金家とともに鐔工の兩大關として並び賞せられる作風は金家と違ひ高彫少く、槌目仕立ての板鐔に地紋を打込み毛彫や透しを施したもので、豪壯雄勁の感あるものが多い。

## 五　建武中興と國民の忠誠

**一六四　重美　後宇多上皇院宣**（萬里小路宣房奉）

東京市　保坂潤治氏藏

この文書は正和三年（紀元一九七二年）頃宣房が、後宇多上皇の院宣を奉じて東寺領である山城國紀伊郡拜師庄穴田里における濫妨を停止せしめたものである。

**一六五　國寶　後醍醐天皇綸旨**

島根縣　出雲大社藏

元弘三年（紀元一九九三年）閏二月後醍醐天皇ひそかに隱岐を出でまし、伯耆に幸せられた翌月、出雲大社の冥助によつて逆臣を退け、世を正理に復せしめんことを宣べ給へるもの、千種忠顯奉の形となつてゐるが、畏くも宸筆と拜せられ、雄大なる御筆勢は御文言の堂々たると相俟つて、深遠なる聖旨の程を拜察するのである。

**一六六　萬里小路藤房筆　佛舍利奉請狀**

京都市　敎王護國寺藏

東寺佛舍利は朝廷の尊崇極めて篤く、その奉請には手續鄭重を極めた、嘉曆元年（紀元一九八六年）八月後醍醐天皇が中宮禧子の御所常盤井殿に行幸遊ばさるゝに當り佛舍利を勘計奉請し給うたが、本書狀は藤房自ら右の由を記して東寺に與へたものである、藤房の筆蹟今に傳はるもの世に稀である。

**一六七　萬里小路宣房　楠木正成對座圖**

名古屋市　關戸有彥氏藏

幕末の勤王愛國の畫家として有名な宇喜多一蕙が天保年間（紀元二四九〇年頃）に描いたものである、萬里小路宣房は後宇多天皇および後醍醐天皇の側近に奉仕せる公卿。

**一六八　國寶　北畠親房蓮華乘院勸學料寄進狀**

和歌山縣　金剛峯寺藏

正平七年（紀元二〇一二年）四月一日親房が自分の所領である安藝海田庄地頭職を高野山蓮華乘院に寄進して勸學料にあてたものである、初め公は代々祖考および亡子顯家等のために一院を建立し追善勤行せんとしたが、その願望を中止して右の土地を學問所料に寄進したのであつた。

**一六九　陸奥國國宣**（北畠顯家袖判）

津市　結城神社藏

建武二年（紀元一九九五年）八月九日付結城宗廣宛、坂東賊軍に與した結城盛廣の遺領を宗廣に預け置く旨を記してゐる、盛廣は宗廣の伯父である。

**一七〇　北畠顯家上奏文案**

京都市　醍醐寺藏

顯家は義良親王を奉じて陸奥靈山を發し南都に入り攝河泉の地に勤王の同志を募るの間、延元三年（紀元一九九八年）五月十五日この文を草して後醍醐天皇の闕下に捧呈し當時の朝政改革を建言したものである、顯家は當時漸く二十一の弱年をもつてして吉野朝廷の興廢をその双肩に擔つたが惜くもその數日後同月二十二日高師直と戰つて壯烈な戰死をとげた。

**一七一　新田義貞畫像**

福井市　藤島神社藏

小川破笠が探幽の描いたものを寫したものである。

**一七二　新田義貞畫像**

福井市　藤島神社藏

像の上中央に「源高院殿前左近衛中將兼播磨新田太守義貞覺阿彌陀佛」の書があり、右下には「嘉永五年歲在壬子春新田大祖大炊介義重苗裔源道純敬拜畫」とある。

**一七三　四條隆資書狀**

京都市　堀部功太郎氏藏

隆資は後醍醐天皇、後村上天皇に仕へ奉り、正平七年（紀元二〇一二年）五月十一日、後村上天皇男山より賀名生還幸の途次敵軍を防いで皇軍に殉じた。

一七四　國寶　新田義貞自筆書狀　（鞍馬寺文書）

京都府　鞍馬寺藏

延元元年（紀元一九九六年）五月湊川の戰後大擧入洛せる足利尊氏以下の賊軍討伐について義貞より同年六月二十三日附を以て鞍馬寺衆徒にその旨を報じたものである。

一七五　新田義貞寄進狀

兵庫縣　伊和神社藏

延元元年（紀元一九九六年）四月二日、新田義貞伊和神社へ天下泰平朝敵滅亡家門安全祈禱のため、神戸鄉々司職を寄進したものである。

一七六　新田義貞證判軍忠狀

東京帝國大學史料編纂所藏

市村王石丸なるものが幼稚であるため、代官後藤信明が戰功を錄して主將たる新田義貞に證判を乞うた文書で、終りの「承了」と花押とが義貞の自筆である。元弘三年（紀元一九九三年）義貞が上野で義兵を擧げ南進するやいち早く馳せ參じ、ついで五月十五日の武藏府中の南方分倍ヶ原の戰、それより公の鎌倉討入の時、同地の前濱一向堂の前における大奮戰などの軍功を記してゐる。

一七七　國寶　名和長年自筆書狀　（鞍馬寺文書）

京都府　鞍馬寺藏

名和長年が元弘三年（紀元一九九三年）後醍醐天皇の隱岐よりの還幸を御迎へして、船上山に奉じた事は著名の事實であるが、これは恐らく同年のもので、鞍馬寺衆徒に宛てゝ北條方沒落の輩を召捕へるやう依頼せるものである。

一七八　楠木正成自筆書狀

大阪府　觀心寺藏

後醍醐天皇は、弘法大師作と傳ふる觀心寺不動明王を請じ御祈禱を行はせらるゝの御意あり、綸旨を下し給うたので正成が綸旨を奉じて觀心寺瀧覺坊および寺僧に申送つた書狀である。

一七九　楠木正行自筆書狀

大阪府　觀心寺藏

興國五年（紀元二〇〇四年）五月、河內觀心寺の鎭守訶梨帝母祠が燒失した際、御神體は火中無事なるを得た、正行は深くその奇瑞を感じ書を觀心寺に送り、慰問の情を述べ、事の次第を後村上天皇に奏聞すべきことを報ぜるもの。

一八〇　楠木正成畫像

兵庫縣　村山長擧氏藏

一八一　楠木正行畫像

大阪府　高貴寺藏

慈雲尊者の贊あり。

一八二　結城宗廣畫像

津市　結城神社藏

矢野玄道の題詠が色紙型に書かれてある。

一八三　白河樂翁感忠銘碑拓本

福島縣　白河町藏

結城宗廣の忠臣事蹟に關する感忠銘碑、「感忠銘」の題字は樂翁の筆になる。

一八四　湊川建碑勘定書

東京市　公爵　德川圀順氏藏

德川光圀が有名な大楠公の碑を湊川に建てたときの入費の勘定書で、佐々介三郎の筆になつたもの。

一八五　重美　太平記合戰圖屛風

奈良縣　飯田眞作氏藏

桃山時代の作と推定され、畫面には千早城の合戰、四國得能軍と賊軍との戰、伯耆船上山より京都への還幸、生田森の合戰などを描いたものと想はれるものがある。

## 六　國民の雄圖と海外發展

一八六　マルコポーロ旅行記英字本

大阪府立圖書館藏

マルコポーロは父とともに支那に來り十七年間忽必烈に仕へ、後ベネチアに歸りゼノアとの戰で捕へられ、獄中で東方見聞錄を書いた、書中初めて日本を西洋に紹介したものとして名高い、本書はユールの校勘になる英字本で數多い刊本中最も優れたものである。

一八七　種子島銃關係文書

東京市　男爵　種子島時望氏藏

天文十二年（紀元二二〇三年）ポルトガル人が種子島に初めて鐵砲を傳へたといふので種子島銃の名がある、しかし事實は稍その前に、和泉の堺の商人によつて旣に畿內地方に傳播し次いで關東に蟠踞した北條氏康がこの武器の偉大性を知つて利用に努めたやうである。

一八八　種子島銃

東京市　男爵　種子島時望氏藏

銃口より彈丸を裝塡する手法の古拙なものであるが、當時の武器界を震駭させたものである、右が渡來のもの、左はそれに據つていくらか改良を加へた內地製のものである。

**一八九　稲富流砲術傳授書**　京都帝國大學圖書館藏

稲富流砲術の開祖、稲富一夢直家が鐵砲操作法の秘傳を繪圖により詳細に示したもので、一町より十五町に至る各種の射程における姿勢二十五相と、諸種の秘藝三十二相を收めてゐる。慶長十四年(紀元二二六九年)二月長澤重綱書寫の奥書がある。

**一九〇　國寶　豐臣秀吉宛ポルトガル領ゴア副王書狀**　京都市　妙法院藏

天正十九年(紀元二二五一年)宣教師ワリニヤーニが聚樂第において秀吉に贈つたゴア副王メセネスの書翰である、皮製で周圍の繪は極彩色の美麗なもの、書中に秀吉の偉業を讃へ、日本在留の宣教師に對する優遇を謝して布教の保護を請うてゐる。

**一九一　豐臣秀吉ポルトガル領ゴア副王に復する書狀案**　京都市　富岡益太郎氏藏

ゴア副王の書狀に對する秀吉の返書の案で「わが國は神國だから邪教の布教は許さぬが、修好を欲するならば來つて貿易をしてもよい」旨をしたゝめ「他日明を征伐にゆくから、そのついでにゴアの地にゆくのは何の造作もない」云々と昂然たる氣概を示してゐる、僧承兌の筆にかゝり、書中印地阿はインデイヤ、毘會盤はビソレイ卽ちポルトガル語で副王の義である。

**一九二　豐臣秀吉朱印狀**　大阪市　小谷勇雄氏藏

慶長之役に當り釜山浦および西生浦に在番すべき擔當を關係諸大名に通知せるもの、慶長二年(紀元二二五七年)のものである。

**一九三　文祿慶長役豐臣秀吉朝鮮出動に關する廻文**　兵庫縣　子爵　脇坂研之氏藏

廻狀を以て諸大名をして應ずべき水軍の人數を返答せしめたもの。

**一九四　豐臣秀吉朱印狀**　兵庫縣　子爵　脇坂研之氏藏

朝鮮こものい東嶋崎城本丸へ他の家中の入るべからざる旨の掟を秀吉より關係諸大名に與へたもの、文祿二年（紀元二二五三年）八月七日付。

**一九五　五大老連署書狀**　兵庫縣　子爵　脇坂研之氏藏

脇坂安治に宛て明人襲來の風聞あるにつき來春順風に援軍を渡海せしむべき旨を通じたもの、連署者は徳川家康、前田利家、宇喜多秀家、上杉景勝、毛利輝元である。

**一九六　豐臣秀吉宛明王國書**　東京市　伯爵　寺内壽一氏藏

明の神宗が萬曆二十五年(慶長二年—紀元二二五七年)秀吉に宛てた國書であるが、文辭整はず恐らく朝鮮で書かれ、秀吉に見せずして途中沒收されたものであらう、書中秀吉を日本國王に封じたにかゝはらず再征の軍を起せるを責めこの上は海陸の兵を進め、秀吉と大阪に會するであらうと不埒にも威嚇の書辭を連ねてゐる。

**一九七　大村純忠耶蘇會總長宛書狀**　京都帝國大學藏

所謂切支丹大名の一人たる純忠が天正十年（紀元二二四二年）正月耶蘇會長に宛てたもので、書中巡察布父（ワリニヤーニ）の歸國に際し、甥千々岩淸左衛門を遣はすことを述べてゐる、本書狀および以下二點の書狀はもとイクリヤにあつたものである。

**一九八　大友宗麟羅馬法王宛書狀**　京都帝國大學藏

前缺のため、文意やゝ通じ難いが、差出人名「普蘭師司居」（フランシスコ）はいふまでもなく大友宗麟の切支丹名であり、宛名に「是壽貴理師度之御代官惠蕩禮閑之御司、そは樣に」（ゼス・キリストの御代官エケレジヤの御司パ、樣）とあるのは羅馬法皇のことで、これ慣用の敬稱である。

**一九九　羅馬字紋章附鞍**（傳大友宗麟所用）　京都帝國大學藏

前輪後輪の外面に丸の中にフランシスコなる教名の略字FRCOの合字を書ける文樣あり、大友宗麟は最も早く耶蘇教に歸依して教名をフランシスコといひ、その印判にもこの鞍に見る如き丸の中にFRCOの印形を用ひてゐた、右の居木の力革孔裏面瀧口に鞍工の花押がある。

**二〇〇　有馬晴信カルデナル・カラハ宛書狀**　京都帝國大學藏

切支丹大名たる有馬晴信が羅馬の樞機員カラハに送つたもので、使節一行の歸朝後、千々岩淸左衛門等の彼地で受けた厚意に對する感謝の禮狀である。

**二〇一　日本青年使節記念碑拓本**　東京市　正木千冬氏藏

天正十年(紀元二二四二年)天主教を信じてゐた豐後の大友義鎭、肥前の有馬晴信、大村純忠等は伊藤滿所ほか三名の少年を使者として羅馬法王の許に遣はした、これは滿所等が西曆一五八五年(天正十三年)セミナリオ・パトリアルカーンを訪へる記念碑の碑文拓本である。

**二〇二　細川忠興羅馬字印書狀**　京都帝國大學藏

忠興は元和六年（紀元二二八〇年）閏十二月薙髮して三齋宗立と稱し、風流を嗜んだ、この文書は宇治の茶師上林三

入の求めにより茶味の出來榮えを報じたもの、印は所謂ローマ字印で印文は tadauoqui とあり、當時流行せる一種の趣味と見るべきである。

**二〇三　扇面古地圖**　兵庫縣　武藤金太氏藏

豐臣秀吉が所持してゐたと傳へられるもので、一面に日常語の日本語と支那語の對譯を載せ、他の一面に日鮮支三國の地圖を裝飾化して描いてゐる、蓋し、文祿、慶長の役に秀吉が作らしめたものと想はれ、その細心周密な計畫が窺はれて興味深いものがある。

**二〇四　航海用皮製地圖**　大阪市　末吉勘四郎氏藏

末吉孫左衞門が用ひた海圖と傳へらる、朝鮮は繼れて島形になつてゐるが、內地の形は整ひ、位置も正しく入つてゐる、西暦一五九六年（慶長元年―紀元二二五六年）出版のリンスホーテン旅行記の地圖に近く、從つてその製作年代もほゞ知ることが出來る。

**二〇五　日本國地圖屛風**　堺市　河盛利兵衞氏藏

世界地圖（次項參照）と共に日本地圖を屛風に仕立てゝ、これと對幅にして坐右に樂しむことが當時行はれた、これもその一つで、五畿七道や郡名などが併記してある。

**二〇六　世界地圖屛風**　堺市　河盛利兵衞氏藏

前項の屛風と對幅、これには明、呂宋の各地の物產や長崎よりの距離が併記してある。

**二〇七　寛政版世界全圖**（司馬江漢筆）　東京市　帝國圖書館藏

江戶時代における西洋畫家として有名な司馬江漢が和蘭人より學んだ銅版の法により寛政四年印行したもので、地形をはじめ赤道、回歸線、極圈等比較的詳密正確に示されてゐる、地球全圖略說はこの圖を地理學上より見て說明したものである。

**二〇八　世界地圖屛風**　堺市　山本吉右衞門氏藏

世界圖として最も古い形のもので、西洋への航船が往復に分けて正確に記入してあり、頗る實用的價値の高いものである。

**二〇九　南蠻屛風**　兵庫縣　山口吉郎兵衞氏藏

南蠻屛風は近世初期に多く製作された、卽ちエキゾチックな西洋文物に對する時人の好奇心がかかる異國の風物を題材とするものを出現せしめたものと想はれるが、また遺品が多く基督敎傳播の地から發見されるので別の意味も考へられ、風俗史的にも歷史的にも價値が高い。

**二一〇　交趾貿易圖**　名古屋市　中島建次郎氏藏

慶長年間南海貿易に從事した京都の豪商茶屋四郎次郎の安南着船を寫したもので、少くも寛永（紀元二二八四―二二三〇三年）を降らぬものである、港は今の佛領印度支那ツーランに當り、小船に曳かれて入港する茶屋船や、日本人町の存在を示し、邦人の海外發展を語る貴重な資料である。

**二一一　異國渡海朱印狀**（十七通）　京都市　相國寺藏

德川家康は外國貿易を奬勵し、商船に朱印を捺した渡航證明書ともいふべきものを與へた、これが異國渡海朱印狀で相國寺には幕府の外交事務を掌る承兌が住職でゐたため斯く十七通も藏してゐる、所謂朱印船とはこれを持つてゐる商船で、その渡航地は朝鮮、呂宋、澳門、安南、暹邏等であつた。

**二一二　山田長政奉納額**（摹）　靜岡市　淺間神社藏

元和年間、シャム（現在のタイ國）に渡つて武名を揚げた山田長政が望鄕の情にたへず、寛永三年（紀元二二八六年）シャムに至つた我が商人に託して、戰艦の圖を故鄕駿河の淺間神社に奉納した、額は天明八年（紀元二四四八年）神社の炎上に燒失したが、その摸寫がこれである、艦上中央に軍扇を開いてゐる甲冑の將が、長政自身であらう。

**二一三　末吉船額**　大阪市　杭全神社藏

寛永四年（紀元二二八七年）大阪平野の貿易商末吉家の末吉船を描いてその氏神平野の杭全神社に奉納したものである末吉家は坂上田村麻呂の後と傳へ、代々平野に住したが、近世初期に勘兵衞、孫左衞門等が出て、家康の保護の下に南洋貿易に從事した。

**二一四　末吉船圖**（淸水寺額摹）　京都市立美術工藝學校藏

寛永十一年（紀元二二九四年）航海安全の祈願のため、淸水寺に奉納した額である、圖中の人物や三味線、煙草盆、煙管等は當時の風俗を偲ぶ好資料である。

**二一五　角倉船圖**（淸水寺額摹）　京都市立美術工藝學校藏

京都の富豪角倉家が、南海渡航に用ひた朱印船の圖である角倉家は初代了以以來、慶長、寛永のころ盛に貿易に從事したが、これは寛永十一年（紀元二二九四年）淸水寺に奉納した額で、船中で男女打交り歌舞、遊宴する有様が描かれ

海を家とする當時の人々の意氣が窺はれる。

**二一六** 濱田彌兵衞臺灣討入圖

長崎縣 濱田俊武氏藏

彌兵衞は長崎の商人末次平藏の貿易船の船長である、寛政五年（紀元二四五三年）六月、臺灣でオランダの總督より不法行爲を加へられたのを怒り、總督ノイツに面接してこれを捕へ、白刄を擬して謝罪せしめ、總督の子等を人質として歸朝した、本圖はこの彌兵衞の武勇を描いたものである。

**二一七** キリシタン版太平記

奈良縣 天理圖書館藏

我國に西洋活版印刷術の傳はつたのは天正十八年（紀元二二五〇年）宣教師ワリニヤーニが長崎に來り、活字印刷機を天草の學林に備へたことに初まる、これより耶蘇會の手で多くの書籍が印行されたが、この太平記もその一つで慶長頃（紀元二二六〇年頃）に出版されたものであらう。

**二一八** シーボルト著「日本」（一八三二、一八五二年版）

奈良縣 天理圖書館藏

シーボルトは、我が寛政八年（紀元二四五六年）ドイツに生れ、文政六年（紀元二四八三年）オランダ東印度會社の醫師として來朝し、我が洋學界に大きな足跡を殘した、彼には我國に關する著書が多いが「日本」もその一つで、我國の地理、歴史、政治、宗教等百般の事物にわたり克明な輸入りで説明した尨大なるものである。

**二一九** ケンフエル德川將軍の前にて踊る圖

長崎市 武藤長藏氏藏

**二二〇** 和蘭船圖

東京市 子爵 松平忠貞氏藏

和蘭船が長崎に來航したころを偲ぶもので、これによつて船の大きさに對する概念を得ることが出來る。

**二二一** 長崎出島圖

東京市 子爵 松平忠貞氏藏

和蘭船長崎來航當時の出島の形や大きさなどを窺知することが出來る。

**二二二** 露西亞使節上陸並應接圖

東京市 伯爵 阿部正直氏藏

嘉永六年（紀元二五一三年）ロシヤ使節プチヤーチンは軍艦を率ゐて長崎に來り、通商と千島、樺太の境界劃定を求めた、上圖は上陸の行列、下圖は十二月長崎西役所において幕府の應接掛川路聖謨、筒井政憲とプチヤーチンとの會見の模樣を描いたものである。

**二二三** 露艦兵員所作圖

東京市 伯爵 阿部正直氏藏

嘉永六年（紀元二五一三年）長崎入港のロシヤ軍艦の兵員の操練、フエンシング等を行へる光景を示したものである。

**二二四** 嘉永六年米艦隊久里濱入港圖

横濱市圖書館藏

嘉永六年（紀元二五一三年）アメリカ海軍提督ペルリが軍艦を率ゐ久里濱に入港、上陸して應接所に入らんとする光景で、陸岸に警備してゐるのは忍、川越、彦根等諸藩の兵士である。

**二二五** 安政元年米艦隊横濱入港圖

横濱市圖書館藏

嘉永六年一先づ我が近海を去つたペルリが翌安政元年（紀元二五一四年）約に從つて再び横濱に來つた時の光景を描いたものである。

**二二六** 亞米利加使節横濱村應接圖

東京市 中村勝麻呂氏藏

安政元年（紀元二五一四年）二月ペルリ横濱上陸の圖であるが、應接所の右側に汽車の摸型の置いてあることが注意される。

**二二七** 亞米利加使節饗應圖

東京市 伯爵 松平正直氏藏

安政元年（紀元二五一四年）二月初めて横濱村に上陸したペルリ以下を幕府の應接掛が應接所において茶菓を饗せる光景を描いたものである、米人側前列向つて右端がペルリでペルリと對坐してゐるのが林大學頭である。

# 七　教學と國體思想の伸展

**二二八　藤原惺窩畫像**　　京都帝國大學藏

惺窩は播州に生れ、名を肅といふ、朱子學を究めて名聲著はれ、公卿、諸侯にして弟子の禮をとる者多く、林羅山はその門下の俊秀である、元和五年(紀元二二七九年)九月十二日五十九歳にして歿し、京都相國寺に葬る、世に近世文運の祖と稱せらる、この畫像は法橋素軒の筆にかゝる。

**二二九　林羅山畫像**　　東京市　林　暐氏藏

羅山は京都に生れ、惺窩に師事した、慶長十三年（紀元二二六八年）徳川家康の侍講となつて幕府に仕へ、常に謀議に參與し、禁中諸法度以下幕府の法令、外國への國書は多くその草するところである、明暦三年（紀元二三一七年）正月年七十五で歿した、この畫像は林家に傳來するもの、探菴守時の筆である。

**二三〇　中江藤樹畫像**　　滋賀縣　藤樹書院藏

藤樹は近江に生れ、藤樹書院を興して陽明學を唱へ、慶安元年(紀元二三〇八年)四十一歳で歿した、その徳化遍く、世に近江聖人と稱せられる、寛政の碩儒佐藤一齋藤樹書院を訪ひ「碩人巳矣幾星霜」の一詩を賦したが、後にこの詩を探龍の筆になるこの畫像に題したものである。

**二三一　山崎闇齋双親畫像**　　京都市　出雲路敬豐氏藏

土佐光起が闇齋の父母の壽像を描き、これに闇齋がその長壽を祈る贊をしてゐる、父は三右衛門、岸和田の生れで淨因と號し、母は近江の生れで舍奈と稱した。

**二三二　山崎闇齋畫像**　　京都市　出雲路敬豐氏藏

闇齋は元和四年(紀元二二七八年)京都に生れ僧となつたが朱子學を土佐の谷時中に學んで還俗した、後會津藩主保科正之を侍講し、寛文十年(紀元二三三〇)神道を吉川惟足に受けて垂加流神道を創始し、天和二年(紀元二三四二年)六十五歳で歿した、淺見絅齋、佐藤直方等はその門人である畫像の贊は正親町實徳の筆にかゝる。

**二三三　山崎闇齋筆文會筆錄稿本**　　京都市　出雲路敬豐氏藏

文會筆錄は二十七卷よりなる、闇齋が小學、近思錄、四書五經について朱註の要領を說いたもので、天和三年（紀元二三四三年）に出版せられた、これはその自筆の稿本である、元文二年(紀元二三九七年)五月松岡雄淵の奥書がある。

**二三四　淺見絅齋書狀**　　東京市　無窮會藏

絅齋より山本復齋に宛てたもの。

**二三五　徳川光圀畫像**　　東京市　公爵　徳川圀順氏藏

光圀は水戸藩主、家康の孫に當る、寛永五年（紀元二二八八年）水戸に生れ寛文元年襲封して從三位權中納言に至つた、治績多く、又明の朱舜水に道を問ひ大義名分を重んじ大日本史の編纂を始めたことは殊に有名である、元祿元年(紀元二三四八年)致仕し水戸西山に閑居し、同十三年薨じた、本畫像は西山莊にあるものである。

**二三六　徳川光圀畫像**　　京都市　高臺寺藏

光圀歿後、南禪寺元云の畫贊あり。

**二三七　大日本史稿本**　　水戸市　彰考館藏

光圀は嘗て史記伯夷傳を讀み修史の志を抱き、寛文十二年(紀元二三三二年)江戸小石川藩邸に彰考館を設け大日本史編纂の業を起した、その趣意は春秋の筆法を以て皇統の正閏をたゞし、人臣を是非し大義を明かにするにあり、尊王思想の發展に寄與するところが多かつた、本書はその稿本で朱筆をもつて多くの訂正が施され、推敲を嚴にし一字一句も忽諸にしない苦心が察せられる。

**二三八　山鹿素行筆「配所殘筆」**　　京都市　山鹿誠之助氏藏

素行が赤穗の配所にあつて、己が幼年時代の勉學から、年次を追うて延寳三年(紀元二三三五年)當時の事までを記し己が立場を明かにした自叙傳である、弟三郎右衛門及長女の夫岡八郎左衛門に與へた書で、彼の自信に充ち溢れた氣强い性格は文中に躍如として遺憾なく表はれてゐる。

**二三九　大石良雄書狀**　　大阪市　森　繁夫氏藏

良雄の自筆にて從弟の池田玄蕃に宛てたもの。

**二四〇　日次詮要記**（赤穗義士關係記事）　　京都府　實相院藏

元祿十五壬午年(紀元二三六二年)より寶永三丙戌年（紀元二三六六年）までの國內の種々相を日記體に書きこめるもので、その中に四、五頁にわたり赤穗義士に關する文献がある、當時の世論を窺ふに足るものである。

**二四一　伊藤仁齋畫像**　　京都市　伊藤孝彥氏藏

仁齋の生存中門弟の誰かゞ寫したものと傳へられてゐるが

筆者を詳かにしない、仁齋の大らかな性格がよく描出されてゐる。

**二四二　伊藤仁齋筆蹟**　京都市　伊藤孝彦氏藏

**二四三　伊藤東涯畫像**　京都市　伊藤孝彦氏藏

東涯は仁齋の長男、名は長胤、堀川の東の涯に居住したから東涯と號した、太宰春臺曾て仁齋を羨んで「仁齋に及ぶ可らざるもの三あり、學師傳に由らざる一なり、仕へざる二なり、子東涯ある三なり」と述懷したといふ、この畫像も門弟の作と傳へられるが、筆者は詳かでない。

**二四四　伊藤東涯遺稿「制度通」**　京都市　伊藤孝彦氏藏

東涯は仁齋の著書を校訂出版しつゝ、忠實な「標註」「釋義」「標釋」を以て家學を解明し、なほ獨自の經學研究に十指に餘る著述をなす一方、歷史、制度に就く驚くべき業績を殘した、制度通十三卷は、その中でも不滅の力作である本書は東涯自筆の草稿本にその子東所の校訂朱筆が入つてをり、寛政九年(紀元二四五七年)刊本の底本となつたものである。

**二四五　松尾芭蕉畫像**　大津市　義仲寺藏

芭蕉は正保元年(紀元二三〇四年)伊賀に生れ北村季吟に師事し藤堂良忠に仕へたが、その夭死に遇ひ遁世の志を起し江戸に下つて俳諧に精進した、常に旅にさすらひ自然の中に詩境を見出し閑寂の心を吟じ所謂蕉風を樹立し、奥の細道等の著作を殘し元祿七年紀元二三五四年)大阪南御堂前花屋で歿した。

**二四六　荻生徂徠畫像**　東京市　荻生傳氏藏

徂徠は寛文六年(紀元二三二六年)江戸に生れ、その識見は經書、詩文のみならず政治、經濟、兵學等各方面に亙つた初め朱子學に從つたが後に古學に一變し古文辭學を修め、その學說は蘐園學派と稱せられて一世を風靡し、享保十三年(紀元二三八八年)歿した。

**二四七　荻生徂徠筆「徂徠山人雜集」**　東京市　荻生傳氏藏

徂徠の讀荀子ほか論稿をあつめたもの。

**二四八　契沖詠草**　大阪市　森繁夫氏藏

契沖が元祿十二年(紀元二三五九年)中西信慶七十の賀に寄せた「鶴契遐年」と題せる詠草で、七十八首よりなる。

**二四九　松平定信畫像**　東京市　子爵　松平定晴氏藏

定信は奥州白河の城主で、天明七年(紀元二四四七年)老中となり、治績を擧げ、世に寛政の治と稱せられ、寛政九年致仕して樂翁と號した、文學を好み和歌に長じ、隨筆花月草紙は有名である、圖は定信晚年の像で狩野養信の筆になり、平禮烏帽子に道服、奴袴をつけ短刀を帶びてゐる。

**二五〇　塙保己一畫像**　東京市　溫古學會藏

保己一は武藏に生れ、幼時失明、江戶に出でゝ勉學に努め寶曆六年(紀元二四一六年)賀茂眞淵の門に入つた、寛政五年(紀元二四五三年)幕府に請うて和學講談所を設け名聲高く文化四年(紀元二四六七年)檢校となり、この年九月歿した、その多くの著書のうち群書類從の如きは殊に後世の學徒に大なる恩惠を與へてゐる。

**二五一　荷田春滿畫像**　京都市　羽倉信眞氏藏

富岡鐵齋の筆である。

**二五二　荷田春滿日本書紀語釋稿**　京都市　羽倉信眞氏藏

日本書紀の語句を把へ假名にて註譯を試みたもの。

**二五三　荷田春滿神代紀訓釋傳類語**　京都市　羽倉信眞氏藏

春滿が日本書紀神代卷の字句を把へて略解を施せるもの。

**二五四　荷田春滿假名日本書紀**　京都市　羽倉信眞氏藏

春滿が漢字を交へず平假名で日本書紀を書下したもの。

**二五五　賀茂眞淵畫像**　京都市　伏見稻荷神社藏

狛諸成贊、眞淵歌および畫の由來を記せるもの。

**二五六　本居宣長畫像**　東京市　本居長豫氏藏

宣長六十一歲の時、尾張の義信に描かせ自ら「敷島の大和心」の歌を書付けたものである。

**二五七　平田篤胤畫像**　東京市　平田盛胤氏藏

篤胤は出羽國秋田に生れ、江戶に出て苦學し、宣長の學風を慕ひ享和元年名簿を松坂に送つたが、程なく宣長が歿したゝめ親しく教を受けることが出來なかつた、常に敬神尊皇を唱へて名聲が高く、著書に古道大意、古史成文、古史徵等がある、天保十四年(紀元二五〇三年)閏九月十一日六

十八歳で歿した。

**二五八　賀茂眞淵懐紙**　大阪市　森　繁夫氏藏

櫻花を愛でた長歌で「もろこしのひとにみせばやみよしののよし野の山の花のさかりを」の反歌がある。

**二五九　本居宣長書狀**　大阪市　森　繁夫氏藏

「忌寸」、「しがらみ」についての私見や、古事記傳神武卷の清書を了せる旨を記してゐる。

**二六〇　平田篤胤文集**　東京市　平田盛胤氏藏

「眞金の鏡にそふる文」など篤胤の隨筆を集めたものである。

**二六一　高山彥九郎懐紙**　大分縣　廣瀬正雄氏藏

彥九郎が廣瀬淡窓から漢詩集をもらつて非常に面白かつたとみえ「大和には卽も珍らし玉をつらねひと日にもゝの唐うたの聲」と淡窓を讃へて歌つたもの。

**二六二　海國兵談**　奈良縣　天理圖書館藏

憂國の志士たる林子平が大いに國防の必要を論じて、西洋の軍器、戰術其他を紹介し、これが抗戰法を論じたもの、千部を施行する豫定であつたが、三十八部を印刷製本した所で、寛政三年（紀元二四五一年）十二月幕府の咎を受けて板木を差押へられた、本書はその原刻木の一である。

**二六三　三國通覽圖說**　山形縣　石垣健作氏藏

林子平の著書である、朝鮮、琉球、蝦夷並に樺太、カムチヤツカ、ラッコ島等の地理や土人の生活等を紹介し、鎖國の泰平に狎れた國民を啓蒙せんとせるものである。

**二六四　賴山陽畫像自贊草案**　京都市　小石暢太郎氏藏

この贊は山陽が東山義亮に描かせた畫像（次項）に記すため書いたものである、しかしその後間もなく山陽は病革りて書きこみ得ず、遂にこの贊は門人の手によつて畫像に記入された。

**二六五　賴山陽畫像**　京都市　賴　久一郎氏藏

山陽の晩年自ら鏡をとつて指圖しつゝ門人東山義亮に描かしめたもの、義亮は姓名を署する習慣あり、ためにこの畫像も初め「東山義亮」と署したが、改めて「東山」の二字を消し「門人」となしたる點注目に値する、贊は山陽の草案（前項）を門人が書せしもの。

**二六六　賴山陽筆蹟**　京都市　賴　久一郎氏藏

小樓一夜聞春雨　深巷明朝賣杏花　これは山陽が習字の手本によく書き與へた詩句である。

**二六七　吉田松陰畫像**　東京市　吉田茂子氏藏

松陰の畫像として傳へらるゝものゝ一つで、贊は松陰の自筆である、二十一回猛士とあるは二十一回とは姓吉田の字劃を合せて作れるもの。

**二六八　吉田松陰書狀**　神戶市　藤本義亮氏藏

**二六九　青木昆陽稿本「和蘭文字略考」**　京都帝國大學圖書館藏

この書は昆陽が和蘭文字について研究せるもので延享三年（紀元二四〇六年）十一月二十一日の昆陽の識語がある。

**二七〇　青木昆陽畫像**　東京市　大槻茂雄氏藏

昆陽は名を敦書といひ、江戶町奉行大岡忠相の知遇を得て幕府に仕へた、時に將軍吉宗は心を洋學に用ひ、元文五年昆陽は命をうけて和蘭語を學び、和蘭文字略考等著書多く我國蘭學の祖といふべく、明和六年（紀元二四二九年）歿した、本畫像は目黑龍泉寺の昆陽の墓碑拓本と併せて一軸としたものである。

**二七一　前野良澤自贊畫像**　東京市　大槻茂雄氏藏

良澤の自畫自贊で、良澤の弟子大槻玄澤の家に傳はるものである、良澤は中津藩の藩醫で、四十七歳の時青木昆陽について蘭學を修め、更に長崎に遊んで吉雄耕牛に學び、杉田玄白等と解體新書を譯したのを初め和蘭譯文略、彗星考その他著書が多い、享和三年（紀元二四六三年）齡八十一で歿した。

**二七二　杉田玄白自贊畫像**　東京市　大槻茂雄氏藏

蘭醫杉田玄白が自畫に自贊を加へたもので九幸は玄白の號である、玄白は名を翼といふ、明和八年（紀元二四三一年）蘭書「人身内景圖」を得てその精妙に感じ前野良澤等とこれを飜譯し解體新書と名づけたことは有名である、文化十四年（紀元二四七七年）八十五歳で歿した。

**二七三** 伊曾保物語　京都帝國大學圖書館藏

この書は萬治二年(紀元二三一九年)正月開版の伊曾保物語である、伊曾保物語は西洋のイソツプの話を飜譯せるもので、この時代以前に行はれてゐたが、この書は繪入の草紙にならうて刊行せられ、繪は日本の風俗をもつて描いてゐる。

**二七四** 伊曾保物語繪卷　福岡縣　堺七左衞門氏藏

有名なる西洋のイソツプ物語を邦文に譯し、これを六卷の繪卷物としたもので、これらの繪卷物は德川時代中期の筆寫にかかり、支那風の家屋、風俗などを描いて物語の說明としてゐる。

**二七五** 司馬江漢書狀　大阪市　森繁夫氏藏

蘭醫江馬春齡に宛てゝエレキテル(蓄電器)使用法などを敎示した書狀で、署名に S. Kookan とローマ字を以て達筆にかゝれてをり、興味深いものがある。

**二七六** 能裝束　花色地龜甲鶴狩衣　東京市　觀世元正氏藏

德川秀忠より觀世九代太夫黑雪が拜領したもの、鶴龜に使用せらる。

**二七七** 重美　能面　泥蛇　(傳赤鶴吉成作)　東京市　觀世元正氏藏

作者吉成は後宇多天皇弘安年中(紀元一九三八―一九四七年)の人で、面は今より約六百五十年前の作、道成寺の赤頭に使用する。

**二七八** 重美　能面　猩々　(傳龍右衞門作)　東京市　觀世元正氏藏

作者龍右衞門は吉成と同時代の人で、面は今より約六百五十年前の作。

**二七九** 能裝束　赤地朝鮮錦法被　東京市　寶生重英氏藏

制作年代不明なるも秀吉時代朝鮮より渡りたるもの、能樂五番目物の武張つたものに用ゆ。

**二八〇** 重美　能面　朝倉尉　(福來石王兵衞作)　東京市　寶生重英氏藏

應永年間(紀元二〇五四―二〇八七年)朝倉家の家臣福來石王兵衞の作にかゝる老人の面で、阿古木等の田夫野人の時に用ゆ。

**二八一** 重美　能面　節木增　(增阿彌作)　東京市　寶生重英氏藏

約六百年前の若い女の能面である、鼻の上に節木があり、また女の面は增阿彌が多いので「節木增」の名がある。

**二八二** 能面　翁　(傳日光作)　京都市　金剛巖氏藏

翁式に用ひる老人のもので、日光作と傳へられる。

**二八三** 能面　延命冠者　(傳福原文藏作)　京都市　金剛巖氏藏

眞の翁の一種、翁式のうち十二月往來の時に用ふ、作者は福原文藏と傳へられる。

**二八四** 能裝束　雲取摺箔藤花文樣縫箔　京都市　金剛巖氏藏

慶長年間の作、摺箔は殆ど脫落し地の褐色と美しき調和を見せてゐる、老女ものなどの腰卷に使用す。

**二八五** 抱一筆　鷹狩獲物圖　東京市　栗山善四郎氏藏

酒井抱一は姬路藩主酒井家の次男に生れたが風流の道に入り、文化文政頃(紀元二四六四―二四八九年)にその名を謳はれた、畫は最初圓山四條派を學んだが後光琳に私淑して光悅流屈指の畫家となり優麗な佳作を多く遺してゐる、この圖は鷹狩の獲物である鶴三羽を竹に吊して松に掛けたもので、恐らく實況の卽寫と想はれ、普通の抱一とは風變りなものであるが、感興に乘つた雅人の趣味が躍つてゐる。

**二八六** 重美　仁清作　色繪釘隱　大阪府　田中太介氏藏

野々村仁清は通稱清兵衞、江戶時代初期の名工であるが詳しくは不明、窯は洛西御室が主であるらしく、仁清の名は仁和寺門前の清兵衞からおこるといはれてゐる、作風極めて優雅であるが、この釘隱は扇面、菊花などに形どり、仁清の作風を代表する逸品である。

**二八七** 柿右衞門作　色繪皿　兵庫縣　山口吉郎兵衞氏藏

酒井田柿右衞門は肥前有田の陶工で、江戶時代の初期に當り、支那康熙、雍正の絢爛たる繪附法に示唆され伊萬里赤繪の錦樣を創造したといはれてゐるが、なほ不明の部分も殘されてゐる、この色繪皿は見込に松下美人、周圍に芭蕉梅などを描き、乳白の素地、赤の色合、透明に盛り上つた綠や黃など柿右衞門の特徵のよく現はれてゐる名品である。

**二八八** 重美　潁川作　色繪十二支鏡文皿　京都市　建仁寺大統院藏

奧田潁川は江戶時代中期の末、京に生れ陶工となり五條大

黒町に住んで家號を丸屋といふ、作るところ交趾、染付などあるが呉州赤繪を得意とし筆勢の鋭さに快感を覺えしめる、この皿は寧ろ謹嚴な作で、中央に四神、周圍に十二支を描いて鏡文を現はし、呉州赤繪の美を發揮してゐる。

**二八九　重美　鍋島色繪野菜圖皿**

東京市　長尾欽彌氏藏

享保頃に始まつた鍋島窯は柿右衞門の系統をうけて同じ肥前に起り、素地が澄み色彩繪附の美しいのをもつて色繪中第一といはれてゐる、この皿は見込に茄子甜瓜などの野菜を描き、下面三方に七寶文を配し、高臺に櫛手をかくなど鍋島の特色を現はし、繪附の美しさを示す代表的なものである。

**二九〇　重美　古九谷花鳥文平鉢**

大阪市　谷口作次郎氏藏

古九谷は江戸時代初期に加賀國九谷地方で燒かれたもので肥前の色繪窯に學び、久隅守景は一時繪附の指導に當つたといはれる、この平鉢はやゝ濁つてブツ〳〵のある白地と紫、黄、綠、赤褐の四つの特徴ある釉藥をもつて簡朴な風趣を示した優品である。

**二九一　光琳筆　秋草文小袖**

東京帝室博物館藏

尾形光琳は元祿の盛期に京にあつて光悦流といはれる優雅な畫風を完成した名畫家であるが、この小袖は江戸の富豪冬木氏のために光琳自ら筆をおろしたもので、その秋草文はよく彼の畫風を示してゐる。

**二九二　重美　木米作　染付開扇鉢**

大阪市　野村德七氏藏

青木木米は明和四年（紀元二四二七年）名古屋に生れ、後大阪で蒹葭堂に會つて陶工にならうと志し、潁川の門に入つて名工となつた、また繪に巧みで山陽、竹田などゝ交り、その名いよ〳〵高くなつた、この鉢は扇形に作り、外面を祥瑞風の文樣で飾り、內面には同じく染付で松下美人を描き、その趣致深い畫法はよく木米の面目を躍如たらしめてゐる。

**二九三　重美　道八作　楓櫻圖木瓜形鉢**

大阪府　濱口龜太郎氏藏

仁阿彌道八は天明三年（紀元二四四三年）京に生れ潁川に學んで名工となり、文化九年（紀元二四七二年）仁和寺宮より法橋に叙せらる、各種の陶法を自在にこなしたが、この鉢は所謂乾山寫しといはれるもので、外から中へかけて櫻と楓とを描いた美しい作品である。

**二九四　茶屋染小袖**

京都市　野村正治郎氏藏

水戸家傳來のものである、地白上布に四季之花を茶屋染めに縫入れた總文樣帷子の壹領で、寶暦頃（紀元二四一一ー二四二三年）京都茶屋家の製作にかゝるものである、茶屋家は幕府および御三家に呉服を用達してゐた。

**二九五　和全作　彩繪織文角皿**

兵庫縣　山口吉郎兵衞氏藏

和全は江戸末期京に生れ、永樂の家業を繼いで名をなしたこの角皿は素地に布片を押しつけて布目をつくり、その上に繪附をして種々の織文を現はしたもので、その技巧が一寸變つてをり、色彩も落着いた味がある。

**二九六　紅綸子友禪束熨斗文振袖**

京都市　京都友禪史會藏

牡丹唐草文紅綸子地の振袖一杯に一つの束熨斗を大きく配し、熨斗の中には七寶つなぎ、龜甲、青海波、雪笹などを精巧に現はし金絲の刺繡を施した豪華な意匠で、有職風を脱した江戸時代の新鮮さを窺ふことが出來る。

## 八　明治維新と世界的飛躍

**二九七　五箇條御誓文草案**（三岡八郎謹書 福岡藤次謹書）

東京市　子爵　由利正通氏藏

明治維新の宏謨を宣明し給うた有名な五箇條の御誓文の第一及び第二草案である、第一草案は三岡八郎（後の由利公正）が原案を草し、福岡藤次（後の孝弟）これに加筆、添書し、さらにこれを淸書したものが第二草案である、木戸準一郎（後の孝允）がさらにこれに加筆し、御前に奉つた。

**二九八　明治天皇宸翰寫**（木戸孝允謹寫）

東京市　侯爵　大隈信常氏藏

明治天皇には明治元年（紀元二五二八年）三月十四日紫宸殿に出御、五箇條の御誓文を立てさせられ、これを公布せられたが、これと同時に宣布せられた宸翰を木戸孝允が謹寫し奉つたものである。

**二九九　陸海軍人に勅諭下賜の圖**

東京市　公爵　山縣有道氏藏

明治神宮外苑の聖德記念繪畫館に飾られてある寺崎武男氏謹寫にかゝる壁畫の下繪である。

**三〇〇　教育に關する勅語**（乃木希典謹書）

東京市　若林賚藏氏藏

紀元二千六百年は教育に關する勅語を賜はつてより恰も五十年に相當する。乃木大將の謹書になる勅語を拜するは殊の外に意義深きを覺える。

**三〇一　日本海海戰大捷の際東郷司令長官へ賜はりたる勅語**（東郷平八郎謹書）

東京市　侯爵　東郷彪氏藏

明治三十八年（紀元二五六五年）五月三十日、聯合艦隊の朝鮮海峽における空前の偉功を嘉せられ、聯合艦隊司令長官東郷平八郎に賜はつた勅語を東郷大將が謹書せるもの。

**三〇二　三條實美筆　楠木正成公を祭る文**

大阪市　田中宗一氏藏

三條實美等の七卿が西走中、防州山口に於て元治元年（紀元二五二四年）五月楠公の命日に同宿の人々とこれを祭るため三條實美が漢文で記した祭文である（三〇四項參照）。これによつて維新の志士の理想とし信條としたものが何處にあつたかが窺知されるであらう。

**三〇三　澤宣嘉筆　七卿落圖**

大阪市　田中宗一氏藏

文久三年（紀元二五二三年）朝議一變のため京都に於ける攘夷派の勢力衰へ、三條實美等七人の公卿も長州藩士と共に長州に下向した。この圖は竹田街道を落ち行くところを七卿の一人澤宣嘉が描いたもので、多くの七卿落圖の原圖である。

**三〇四　三條西季知筆　楠木正成公を祭る文**

大阪市　田中宗一氏藏

（三〇二項參照）七卿が西走中、筑前太宰府に於て慶應元年（紀元二五二五年）五月楠公の命日に同宿の人々とこれを祭るに際し三條西季知が和文で記した祭文がこれである。

**三〇五　平野國臣紙撚歌**

京都帝國大學內　尊攘堂藏

平野國臣は夙に勤王の志厚く、米船渡來の刺戟を受け、決然郷里福岡を脱藩、皇軍に奔走し、文久三年（紀元二五二三年）七卿の一人澤宣嘉を奉じて但馬生野に義兵を擧げたが軍利あらず、京都に送られ元治元年（紀元二五二四年）七月刑死をとげた。この紙撚を以て紙に貼りつけた文字歌は獄中において作るところのものとして世に有名である。

**三〇六　岩倉具視自筆日記**（岩倉公關係文書卷二にあり）

京都市　岩倉公舊蹟保存會藏

岩倉村蟄居中、慶應二年（紀元二五二六年）五月十三日より同六月二十日までの日記である。

**三〇七　岩倉具視筆「叢裡鳴虫」**

京都市　岩倉公舊蹟保存會藏

慶應元年（紀元二五二五年）八月洛北岩倉村に幽居中、具視が薩藩士井上石見に託し小松帶刀、大久保利通に寄せたる意見書である。當時の時局を收拾するには、第一、先づ將軍上洛、天下人心一和の基を開くこと、第二、有力の五藩を五大老として國政に參與せしめること、第三、一橋慶喜を後見職に、松平春嶽を大老職に擧げ、將軍內外の政務を輔佐せしむること、の三事策實行の必要ありとなし、政令二途に出づる弊を除き以て朝權の回復を策せんとせるものである。卽ち公武合體論の薩摩と、極端なる攘夷論の長州とを協力せしめて內外の難局を切拔け維新の大業を成就せしめんとせる自筆の意見書である。當時の實情よりしてこれは薩藩だけに示した秘中の秘たるが故に特に人手を煩はさず自ら總てを自筆したものである。

**三〇八　岩倉具視筆「國事意見書」**（岩倉公關係文書卷二十五にあり）

京都市　岩倉公舊蹟保存會藏

慶應三年（紀元二五二七年）秋人材の登用、開國進取、富國强兵について、腹案を記して大橋愼三に送り、文飾を加へしめ朝臣に示さんとしたものであるが、然し遂に公にせられずしてやんだものゝやうである。

**三〇九　久坂玄瑞筆「文天祥正氣歌」**

京都帝國大學內　尊攘堂藏

「辛酉抄春錄示思市品川兄、江月齋日下誠道」と署したるより見れば、文久元年（紀元二五二一年）玄瑞二十二歳の時これを書して品川彌二郎に贈つたものと知れる。南宋末路の忠臣文天祥の感化は深く我が志士の間に滲透し、その正氣歌は最も愛誦されたのである。

**三一〇　佐久間象山筆蹟**

京都帝國大學內　尊攘堂藏

ナポレオンの像に題する詩である。

**三一一　高杉晉作筆蹟**

京都帝國大學內　尊攘堂藏

是は高杉晉作が先師吉田松陰を弔うて賦するところの詩であつて追慕の至情字句に溢るるものがある。結句に「花落鳥啼已一年」とあるにより松陰の歿後一年、卽ち萬延元年（紀元二五二〇年）の作と推定される。

**三一二　藤田東湖筆蹟**

大阪市　渡邊四郎氏藏

「文臣不惜錢武臣不惜死則天下太平」と東湖が例の達筆を揮つた扁面である。

**三一三　坂本龍馬筆蹟**

大阪市　渡邊四郎氏藏

龍馬、人に招かれて皇事を談じ、更に未來の大政の事に及び卽ち感有りて賦するところの七言絶句であつて、妖氣を

止めて天日正邪の分を開き、皇威伸張するの日、蠻賊を撲ち退けんとする壯大の氣概を吐露したものである。

**三一四　山岡鐵舟自畫自賛像**

大阪市　渡邊四郎氏藏

「壽夭本同病亡戰沒渾是一陣風」の自贊は如何にも鐵舟の自畫像に相應してゐる。

**三一五　德川慶喜書狀**（岩倉公關係文書卷八にあり）

京都市　岩倉公舊蹟保存會藏

上野大慈院に謹愼中の慶喜が、明治元年（紀元二五二八年）正月官軍の江戸進擊につき謹愼の本意貫徹、官軍を止めて都下の騷亂を免れしめ、且つ德川家が無事永續して忠節をつくし得るやう御所向への御周旋を靜寬院宮へ願つた自筆の書狀。

**三一六　大久保利通筆　薩、長、藝三藩盟約書草案**

京都帝國大學內　尊攘堂藏

この盟約書は慶應三年（紀元二五二七年）九月八日京都において薩、長、藝三藩が相集り協議の結果決定したもので、この書の草案は大久保の筆に成り藝州をして盟約に參加せしめたのも亦大久保の手腕であつた。この盟約成つて討幕の大事も愈最後的の決定を得、皇政復古の業始めてその端緖を啓いたのである。

**三一七　大久保利通書狀**（岩倉公關係文書卷一にあり）

京都市　岩倉公舊蹟保存會藏

明治四年（紀元二五三一年）九月十七日當時異論多かつた遣歐使節に關し板垣退助を同意せしむべく、板垣と西鄕との談合の盡力を依賴せるものである。

**三一八　木戶孝允書狀**（岩倉公關係文書卷十にあり）

京都市　岩倉公舊蹟保存會藏

明治九年（紀元二五三六年）五月三十一日、皇室費制定に關する意見をのべたもの、木戶は時に內閣顧問。

**三一九　大村益次郎軍事意見書**（岩倉公關係文書卷十にあり）

京都市　岩倉公舊蹟保存會藏

兵部振興につき主管輔相であつた岩倉具視の下問に答申したもの、明治元年（紀元二五二八年）十一月晦日の日附がある。

**三二〇　政體書草稿**

東京市　子爵　福岡孝紹氏藏

政體書は五箇條の御誓文にもとづき官制を定め政府の組織を建てたもので、明治元年（紀元二五二八年）閏四月二十七日汎く頒布された、これはその草案で福岡孝弟の筆にかゝるものである。

**三二一　民選議院假規則**

東京市　佐佐木信綱氏藏

本稿は左院二等議官松岡時敏が命を受け明治六年起案せるもの、現行憲法起案以前に元老院の起案に係るものあることと近時世に知らるゝに至つたけれども、更に遡つて左院の起稿ありしとの說があつたが未だその正文を知るを得なかつた、本稿は正にその一部である、また明治政治史においては明治七年（紀元二五三四年）の副島種臣、後藤象二郎、板垣退助等の民選議院設立建白を以て憲政運動の第一歩としてゐたが、本稿の主張によりその以前既に政府部內においても民選議院設立の意嚮のあつたことを知り得る重要な史料である。

**三二二　山縣有朋今樣歌**

京都帝國大學內　尊攘堂藏

この今樣歌（いつかむかしのくにふりに　かへしてこそは皇の　みやこの春の花をしも　かざしてあそふ日もあらめ）はその詞書に見ゆる如く壬戌（文久二年—紀元二五二二年）の春有朋が中山卿の別莊に召された時の作で、何時の日か皇政を古に復して大君の下に都の春を壽がんとの冀望を述べてゐる、但し本書はその後慶應三年（紀元二五二七年）に至つて右の舊作を揮毫したものである。

**三二三　西鄕隆盛書狀**

大阪市　渡邊四郎氏藏

征韓論に破れた後西鄕が吉井幸輔にあてた書翰で、天恩の有難さ、國力擴張の急務を說き、特に露西亞、淸國に對する我が軍備の必要を力說して「徒らに長袖流の文弱では決して國力維持の方法が立たぬ云々」と書いてゐる。

**三二四　勝海舟筆蹟**

大阪市　渡邊四郎氏藏

明治二十二年（紀元二五四九年）二月紀元の佳辰を以て帝國憲法を發布せられ我が國憲政の基礎はこゝに確立した、本書はその後二十五日目に、勝海舟が國勢を論じ、この秋に當り大いに剛直不撓の氣槪の政府に須要なることを主張したものである。

**三二五　伊藤博文修正憲法稿本**

東京市　公爵　伊藤博精氏藏

**三二六　條約改正に關する伊藤博文の覺書**

東京市　公爵　伊藤博精氏藏

明治十六年（紀元二五四三年）獨逸駐日公使ホルレーベンが賜暇歸國に際して伊藤公が歐洲諸國の對條約改正意見を探知するやう內談した當時の覺書である。

**三二七　伊藤博文筆元老內議の大意**

東京市　公爵　伊藤博精氏藏

露國は滿洲還附條約により明治三十六年（紀元二五六三年）四月八日を期し滿洲より撤兵することになつてゐたが、も

し露國にして撤兵を實行せざるときは、我國は國際信義に基き露國に抗議する方針であつた、しかしその抗議は、場合によれば一戰を交ふるも辭せざる覺悟の下に行はれなければならなかつた、よつてこれに先ち三月十五日元老、閣臣會議を開いて對策を議したが、これはそのときの覺書である、當時我が軍備未だ整はず軍當局には確信がなかつたが、伊藤はよく首相桂を扶けて、外交の强化を計つた、對露方針を決した最初の國家的文献である。

三二八　伊藤博文筆三國干涉と我方針

東京市　公爵　伊藤博精氏藏

三國干涉當時の首相伊藤博文が舞子に病を養つてゐた陸奥外相を訪ふて示した自筆のメモで、三つの方策が示されてゐる、伊藤は第二に示された列國會議を招集すべしといふ說を主張したが、陸奥はこれに反對し、三國の干涉を拒否すべしと提議した、伊藤はこれに反對、論議の末第三の無條件還附に決したものである。

三二九　伊藤博文絕筆

東京市　侯爵　井上三郎氏藏

明治四十二年(紀元二五六九年)遭難の日、伊藤博文がハルピンに赴く途中、車中において作り隨行の室田義文に與へたものである、下の題文は杉聽雨。

三三〇　伊東祐亨「懷舊帖」(丁汝昌關係)

東京市　伯爵　伊東靖祐氏藏

こゝに展示せるものは明治二十八年(紀元二五五五年)清國北洋水師提督丁汝昌より我が聯合艦隊司令長官伊東祐亨中將に宛て休戰を乞ひたる降伏狀で、內容には艦船、砲臺、兵器を献じ、それによつて人民の生命を助けて歸京を許されんことを乞うてゐる。

三三一　伊東祐亨筆黃海海戰大捷の詩

東京市　子爵　小笠原長生氏藏

三三二　陸奥宗光書狀

東京市　伯爵　林雅之助氏藏

明治二十七年(紀元二五五四年)日清開戰間もなく當時外務大臣であつた陸奥宗光から當時の外務次官林董に宛てたもの。

三三三　日清戰役從軍スケッチ(黑田淸輝筆)

東京市　美術研究所藏

明治二十七年(紀元二五五四)二月、十年間の佛蘭西留學から歸朝した黑田畫伯は、八月清國に對する宣戰の詔勅下るや十一月巴里のモンド・イリユストレーの通信員に囑託せられて從軍、新聞記者隊に編入せられ、第二軍司令部に從ひ各地で健筆をふるつた。

三三四　日清戰役凱旋門寫眞(明治二十八年五月)

京都市　中川忠三郎氏藏

三三五　乃木希典筆蹟

奈良縣　飯田眞次氏藏

乃木大將の歿後遺物處分の際、姻戚の關係により湯地定基翁を經て寄贈を受け、以來飯田家において祭祀し來つた、蓋し大將はこの書を靖國神として自ら禮拜したものといふ湯地家は乃木靜子夫人の實家にして定基翁は夫人の實兄である。

三三六　乃木希典筆蹟

下關市　脩攘堂藏

次項の乃木大將農夫姿木像を容れる木箱の蓋の裏に乃木大將がこの「爾靈山」の詩を自書したものを後に額仕立となしたものである。

三三七　乃木希典農夫姿木像

下關市　脩攘堂藏

乃木大將の姻戚にあたる彫塑家長谷川榮作氏の作、左手に鍬を持つた二尺大のもので、大將の那須野時代の面影を傳へる。

三三八　乃木靜子夫人自筆辭世歌

奈良縣　飯田眞次氏藏

三三九　乃木希典筆旅順陷落歌

神戶市　武岡忠夫氏藏

陸軍恤兵部製作の封緘ハガキに股野藍田作の旅順陷落歌を乃木大將が書いたもので、三十八年一月二日第三軍第三野戰局の消印が捺してある。

三四〇　東鄕平八郎筆蹟

東京市　竹內重利氏藏

日本海大海戰を想起する有名な「接敵艦見之警報聯合艦隊欲直出動擊滅之本日天氣晴朗波高」を書したる幅。

三四一　三笠艦上の東鄕司令長官

大阪市　三尾邦三氏藏

東城鉦太郎畫伯筆の圖に東鄕元帥が「皇國興廢在此一戰各員一層奮勵努力」のいはゆるZ信號を賛したもの。

三四二　東鄕平八郎日記

東京市　侯爵　東鄕彪氏藏

日露開戰當初のもので、如何にも克明に自筆されてある。

**三四三　日露戰役媾和條件に對する大山巖の朱記**

東京市　遊就館藏

日露戰役の滿洲軍總司令官であつた大山大將が、その媾和條件に對し朱筆を入れたもの、本文の横に書しあるが卽ちそれである。

**三四四　日露戰役滿洲軍總司令部凱旋圖**

京都市　桃山中學校藏

滿洲軍總司令部が凱旋當日の奉天停車場前の實況を橋本關雪畫伯が描いたもの。

二千六百年史展覽會圖錄解說　奥附

昭和十五年十月十日印刷
昭和十五年十月十五日發行

不許複製轉載

編輯兼發行者　大阪市北區中之島三丁目三番地　株式會社朝日新聞社　樋口正德
印刷者　京都市中京區新町通竹屋町南入　株式會社便利堂　佐藤濱次郎

發行所　大阪市北區中之島三丁目三番地　株式會社　朝日新聞社

終